

渤海上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年

中村 亜希子

要旨 小稿は中国黒龍江省寧安県に位置する渤海の上京龍泉府址から出土した軒丸瓦を文様によって編年し、それを製作技法の観察から裏づけしたものである。

渤海国は自国書を持たないため、その歴史を考えるにあたっては遺跡からの出土遺物の検討が非常に重要な位置を占めている。従来、中国や日本、北朝鮮等の研究者が軒丸瓦の文様の分類や編年などの研究を行っており、近年は特に日本において東京大学考古学研究所蔵の遺物を対象資料とした研究が盛んに行われている。しかし、従来の研究は主に文様によるもののみであることから、製作技法との対応関係を明確にし、さらに丸瓦や平瓦との対応関係を明らかにしていく必要性を感じている。本稿ではまずその研究の基本をなす編年を提示し、今後、上京龍泉府址での出土地点による比較や他遺跡の出土品との比較を通して渤海国の歴史を明らかにしていきたい。

はじめに

海渤海国は698年から926年にかけて、現在の中国東北地方、ロシア沿海地方、朝鮮半島北部にまたがって存在した国である。しかしこの渤海国は自国書を持たず、その国の政治や文化に関して中国や日本などの外国の文献に名を残すのみであるため、詳しい歴史を知ることが非常に困難とされる。本論文で扱うのは、この渤海国の都が最も長く置かれた上京龍泉府址に比定されている東京城（中国黒龍江省寧安県・図1）を東亜考古学会が1933年及び1934年に調査した（原田・駒井 1939）際の出土資料のうち、現在東京大学考古学研究所に収蔵されている資料の一部である¹⁾。



図1 渤海上京龍泉府址位置

1 研究略史

上京龍泉府址出土の瓦の研究については2005年の田村晃一氏の論文（田村 2005 a）でまとめられているように、古くは1935年に鳥山喜一氏の瓦当に関する所見（鳥山 1935）があり、『東京城』（原田・駒井 1939）においては原田淑人・駒井和愛両氏の蓮弁の枚数による4種に分類する編年案が出されている。また、三上次男氏も渤海の瓦当を出土地域によって分け、歴史的背景を考察した上でその位置付けを行っている（三上 1947）。一方、上京龍泉府址（東京城）ではその後1963年及び1964年に中国と北朝鮮によって合同調査が行われ、その報告書（中朝合同考古学発掘隊1966・中国社会科学院考古研究所 1997）において瓦当文様を4類17型式に分類しているが、田村論文でも指摘されているように各型式間の関連についてはあまり触れられていない。また、李殿福氏の分類案（李 1991）、リュ・ビョンフン氏による分類案（リュ 1992）、劉濱祥・郭仁両氏による分類・編年案（劉・郭 1995）等がある。これらの研究史については2005年の田村氏の論文に詳しく紹介されているためこちらを参照されたい。

一方、最近の日本での研究では、田村氏が5回にわたって瓦当文様についての論文を出している（田村 1993・2001・2002・2004・2005 a）。分類基準は1993年、2001年、2004年、2005年にそのつど若干の変化が見られるが、瓦当文様を大きく中心飾り・蓮弁・弁間飾りの3部位に分けてそれを総合するという分類法は一貫しており大筋に変化は見られないため、今回は氏の最新の論文における分類案及びその編年について簡潔に紹介する。2005年の論文において田村氏は、以前は注目していなかった瓦当のサイズにまず注目し、その直径によって大きいグループ（直径17～15cm）と小さいグループ（直径13～10cm）に分け、はじめに大きいグループを対象に文様の分類を行っている。これを簡潔にまとめると下記のようなになる。

- 1 式：7 弁，珠文は円環の内側，弁間飾りは紡錘形
 - a：珠文 7 個
 - b：珠文 9 個
- 2 式：6 弁，珠文は円環の内側，弁間飾りは紡錘形
 - a：珠文 10 個
 - b：珠文 8 個
 - c：珠文 6 個
- 3 式：6 弁，珠文は円環の外側に 6 個，弁間飾りは紡錘形
 - a：普通のもの
 - b：珠文と珠文の間に十字形を配するもの
- 4 式：6 弁，珠文は円環の外側に 6 個，弁間飾りは十字形
 - a：弁と円環の間の空間が狭い

b : 弁と円環の間の空間が広い

c : 弁間飾り・珠文の位置は前二者と同じだが、線が細く、力弱く表現

d : 弁間飾り・珠文の位置は前三者と同じだが、蓮弁はやや細長く表現され弁肉は線状に表現

5式 : 6弁, 珠文は円環の外側に6個, 弁間飾りは植物形

6式 : 6弁, 珠文は存在しない, 弁間飾りは十字形

a : 弁はごく普通のハート形で, 十字形は小さい

b : 弁が細長く, 十字形も大きい

c : 弁が細長く先端が尖り, 十字形はbより小さい

d : 弁のハート形の底部輪郭線が凹まず直線

また、氏はこれらの瓦当の変遷として、1 a 式のうち弁の膨らみが輪郭線いっばいに見られるものを最も古い時期の瓦当とし、弁の類似から2 a 式・2 b 式も最古段階のものとしている。また、上京龍泉府址後期の4式の瓦当の出土状況からこの頃宮殿地区に大きな改修工事が行われた可能性を説き、一方、上京龍泉府址最後の時期に作られた瓦当としてモチーフが形骸化した6 d 式のものあげている。編年は田村氏の2001年の論文や2002年の論文における第1類・第2類⇒第2類B⇒第3類A⇒第3類Bという編年と2005年の氏の論文における分類の対応表から察するに、珠文が円環の内側から外側に移りなくなっていくという変化、つまり1・2式⇒3式⇒4式⇒6式（5式については2001年の段階で省略されているが、2005年論文において5式の弁と3式の弁の共通点を挙げられているところをみると、この頃に位置付けられているようである）という変化を考えているようである。

さて、筆者はこの田村氏の編年に大筋同意し、その成果を大いに評価するものであるが、若干意見の違いがあるため先ずはその所見を述べ、次章に於いて筆者の考える文様の分類案を提示したいと思う。

まず、4 d 式と6 a 式の設定について、問題点を指摘したい。4式と6式は珠文の有無で大別されているが、4 d 式の細長い蓮弁は他の4式と明らかに異なり、むしろ6式の蓮弁の形態に近い。そして6 a 式も6式の中では明らかに他のものと異なり4式の弁に近いのである。田村氏も文中で破片からその型式の判断が不可能なものの中に「4式か6式のいずれかに入る破片が17点ある」と述べているように、この分類は珠文の有無で行うよりも蓮弁の形態で行うほうがよいのではないかと思われる²⁾。なお、小型瓦当について説明している箇所でも田村氏は「瓦当面が小さいため中心飾りの珠文を省略したものもあるのではないかと考えるようになった」という意見を提示していることについては筆者もまったく同感であり、さらに6 a 式の瓦当とまったく同じ蓮弁・文様構成の小型瓦当が存在すること（田村2005 a 図13-5）を考えると、なおさら珠文の有無よりも蓮弁の形態を優先的に考える必要性を感じる。その他の問題点については分類を行う際に詳しく説明を行う。

一方、上京龍泉府址出土瓦の製作技法についてはこれまで『東京城』や『六頂山与渤海鎮』等で若干の記載があるものの、詳細な観察報告はなされたことがなく、筆者が卒業論文を執筆した時点では大して参考とできるものが存在しなかった。しかし、2005年、上記の『東アジアの都城と渤海』において清水信行氏によって平瓦及び丸瓦の綿密な観察報告が行われ（清水 2005）、その製作技法についての研究が大いに進んだ。

2 検討対象資料

筆者が今回扱ったのは前述のとおり東亜考古学会が上京龍泉府址を発掘したときに出土した遺物のうち現在東京大学考古学研究室に収蔵されている B.T.1～B.T.215の箱に納められた軒丸瓦全点（767点）と B.T.61～B.T.215の箱に納められた丸瓦96点である。（丸瓦は時間の制約上全点を見ることができなかった³⁾）。なお、今回筆者が観察対象資料として丸瓦を扱ったのは、軒丸瓦の丸瓦部の製作技法と丸瓦の製作技法がほぼ同じと思われるため、軒丸瓦の製作技法を解明するための参考資料になると考えるからである。

3 分析

本稿では、上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年を行うにあたって、まず文様による型式学的な分類を行った上で大まかな編年を設定して番号で表し、それらの製作技法の観察に見られる変遷を考え合わせた上で整理し、編年を行うものとする。

3-1 文様による分類

文様による分類を行うにあたって、筆者もまずは田村氏と同じように出土点数の多い主なものを分類する。分類にあたって筆者が目する項目は主に蓮弁の形態と膨らみ具合、弁間飾りの形態、珠文の位置である。それらを個別に細分していき、組み合わせた上で分類する。なお、瓦当のサイズは中朝合同調査報告時の分類（大型・中型・小型）に従うものとする。

(1) 蓮弁の形態と膨らみ具合

蓮弁を形態によって大きく3つに分類した上で肉部や輪郭線の膨らみ具合によって細分を行う。

Aグループ…やや細長いハート型。（図2）

- I：輪郭線の間で断面がなだらかな山形の肉部を持ったもの。
- II：肉部に稜を持ちやや肉部が薄くなるもの。
- III：肉部が輪郭線から離れ大きく突き出た膨らみを持つもの。
- IV：肉部が輪郭線の内側で凹まずに急に膨らむもの。

Bグループ…Aグループのものに比べくっきりした谷間を持ち、下半部で逆三角形にすぼまる、やや横に太いハート型。（図3）

- I：肉部に稜を持つ。膨らみはややなだらか。

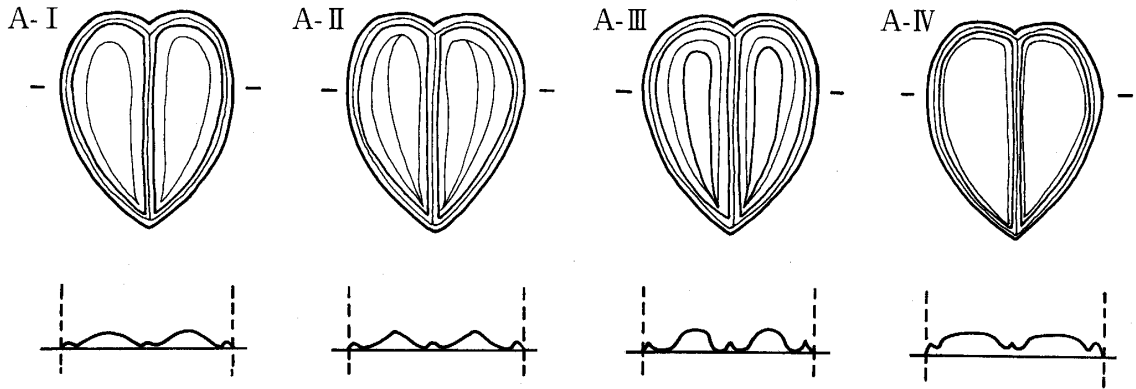


図2 蓮弁Aグループ模式図

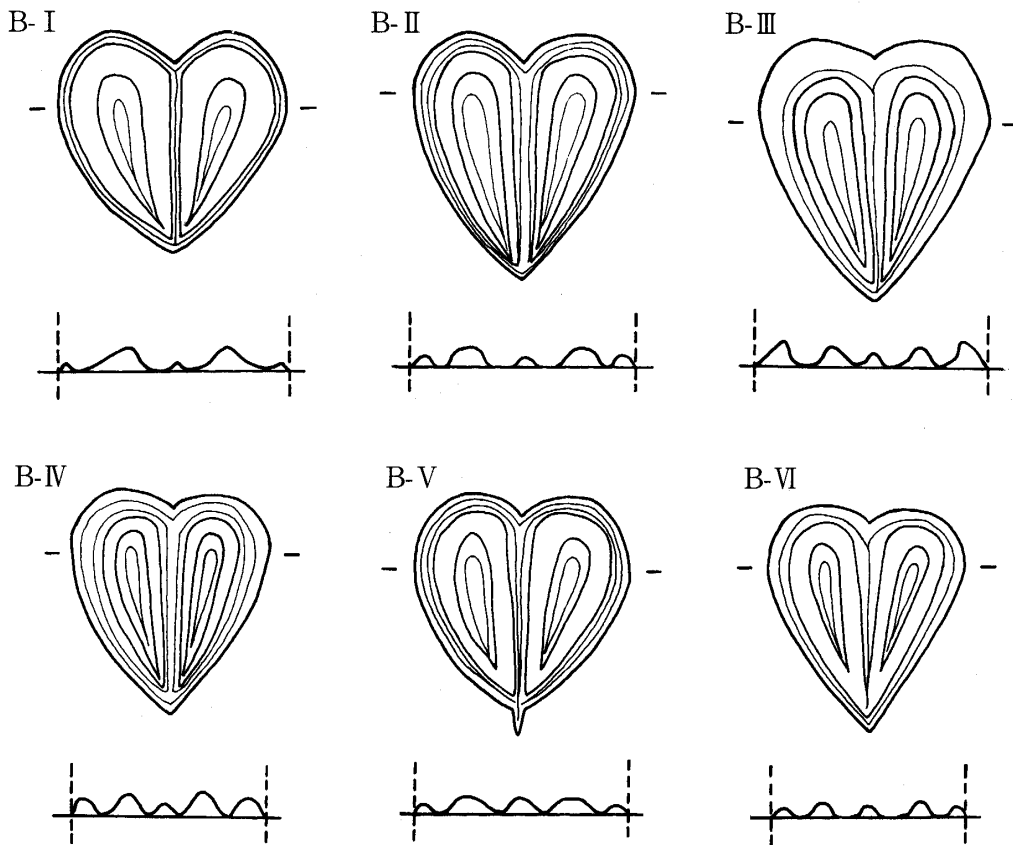


図3 蓮弁Bグループ模式図

- II：縦長なハート型。輪郭線が太く断面が丸い。肉部との間に隙間を持つ。
- III：輪郭線・肉部共に鋭い稜を持ち断面が三角形。
- IV：IIIに比べやや小ぶりで稜もやや丸みを帯びる。
- V：さらに丸みを帯び、中央区分線がハート型の先端から飛び出る。
- VI：輪郭線・肉部共に線が細い。

Cグループ…ハート型の谷間が弱くなり、平らなものもある。全体的に細長くなり、輪郭線と肉部はほぼ同じ太さ。さらに細分ができるかもしれないが今回は細分しなかった。

(図4)

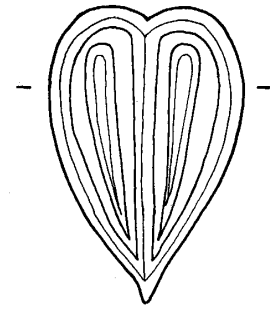


図4 蓮弁Cグループ
模式図

(2) 弁間飾りの形態

弁間飾りの中で主に観察されるものは以下の三種類である。(図5)

- ・ 紡錘形
- ・ 十字形：線の長さや太さなどは大小様々
- ・ 植物形：田村氏によって「植物形」と呼ばれているため筆者もその呼び方に従ったが、実際は図のような形態をしている

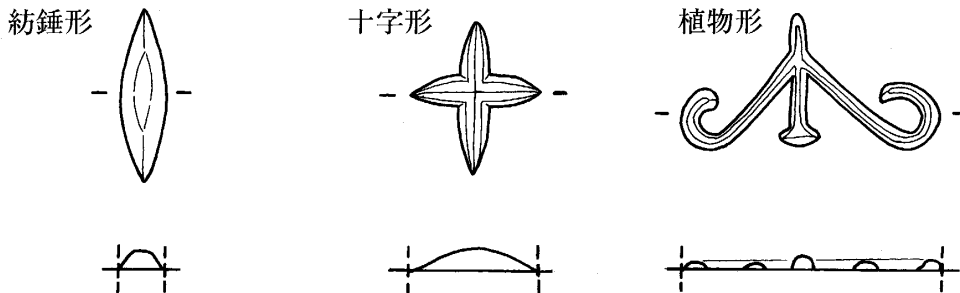


図5 弁間飾り模式図

(3) 珠文の位置

珠文が置かれている位置は殆どが

- ・ 中央突起と円環の間に位置する。(以下「円環内」と呼ぶ)
- ・ 円環と蓮弁の間に位置する。(以下「円環外」と呼ぶ)
- ・ 珠文が存在しない。

の3種類に分けることができる。また、今回観察した資料の中には円環が存在せず中央突起と蓮弁の間に珠文が位置しているものもあったが、これらは『東京城』の報告にはなく、また数点に施された注記からおそらく八連城から出土したものが混入したと思われるため、今回は分類から省略した。

以上、これらの文様構成要素を組み合わせた上で珠文の数も考慮すると以下の第1表のような組み合わせができた。

このように14種類に分類したものに仮分類No.を与えて、それぞれに分類されたものに見られるほかの特徴をあげていく。また、各部の部分名称は田村氏が2005年の論文(田村 2005 a)で用いた名称に従うものとする。

渤海上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年

第1表

弁数	弁の形態	弁間飾り	珠文の位置	珠文の数	仮分類No.
7	A-I	紡錘形	円環内	7個	①
7	A-II	紡錘形	円環内	7個	②
7	A-III	紡錘形	円環内	9個	③
6	A-I	紡錘形	円環内	10個	④
6	A-IV	紡錘形	円環内	10個	⑤
6	B-I	紡錘形	円環内	6~8個	⑥
6	B-II	紡錘形	円環外	6個	⑦
6	B-II	紡錘形	円環外・十字	6個	⑧
6	B-III	十字形	円環外	6個	⑨
6	B-IV	十字形	円環外	6個	⑩
6	B-V	植物形	円環外	6個	⑪
6	B-VI	十字形	珠文無し		⑫
6	C	十字形	円環外	6個	⑬
6	C	十字形	珠文無し		⑭

①：上京龍泉府址出土の蓮花文瓦当のうち最も文様が繊細で整っている。離れ砂を用いていたと思われ、表面がざらざらとしており、時として文様がぼやけていることもある。範の劣化による凹凸はあまり見られず中央突起や珠文もはっきりとしている。大型。(図6-1, 2⁴⁾)

②：①と同じように表面がざらつくものと、範の劣化による凹凸が多少見られるものがある。大型。(図6-3, 4)

これらは田村氏2005年分類(以下、田村新分類とする)の1a式に対応し、氏の言う「弁の崩れ」によって細分をしたということになる。

③：特に文様部で範の劣化による凹凸が目立つものが多い。また、範の傷から同範と思われるものも複数見られる。大型。(図6-5~7)

これは田村新分類1b式に対応する。

④：蓮弁の形態をA-Iとしたが、詳しく言えばI程ほど肉部の厚みはなく、また、若干A-IIのような特徴も持っている。範のズレが見られることもあり全体的に①よりも粗雑である。大型。(図7-8, 9)

⑤：輪郭線と肉の間など文様部の凹凸が強く、④よりも全体的に厚みがある。大型。(図7-10, 11)

田村新分類ではこれらは2a式とされている。

- ⑥：①～⑤のように珠文が円環内にあるが、蓮弁の形態が大きく異なっている。珠文の数は6個のものと8個のものが確認されたが、中朝の報告では7個のものも報告されており、文様に変化する過渡期のものかと思われる。表面に範の木目と思われる線を残すものや劣化のための凹凸を持つものが見られた。大型。(図7-12～15)

田村新分類では、これらは珠文の数によって2b式と2c式に細分されている。これらは蓮弁の形態にもやや違いが見られるが、出土数は少ない、また、中朝合同調査時には、珠文が7個であるが全体的な特徴は珠文が6個のものと同じものが出土しているため、文様変化過渡期のものとして分類上ひとつにまとめた。

- ⑦：珠文は円環外に移る。蓮弁は⑥に比べて細長いものもあるが、その他の特徴は似ている。半拉城からもこのタイプのもが多く出土している。珠文がぼやけているものが見られる。大型。(図8-16～20)

これは田村新分類3a式にあたる。氏も述べているように弁が大きなものと弁が短く幅広のものが存在するが、1個体中に両方の弁が共存するものも存在するためまとめることとした。

- ⑧：⑦とほぼ同じ特徴を持つが、珠文と珠文の間に十字形を配している。大型。(図8-21)

田村新分類3b式に該当。筆者ははじめ、これらを⑦に含めようかと思ったが、思いのほか数があったため、ここでは便宜上分類することとした。

- ⑨：弁間飾りが十字形となる。珠文が薄く弱いものがあり、表面は細かい凹凸が見られる。大型。

田村新分類4a式。氏も述べているように小さな破片が多い。数量も多くはないが、今の段階では細分することとする。(図9-22, 23)

- ⑩：最も多く出土しており、範による傷から同範と確認されたものが多数ある。大型。(図9-24～27, 図10-28, 図11-29)

田村新分類4b式と4c式。田村氏は「線が細く、力弱く表現されている」として細分されているが、基本的に大差はないとしてまとめた。氏の論文ではこの中の同範のものについて詳しく述べられている。

- ⑪：弁間飾りが植物形であり、弁の先端が少し突き出る、他とは少し異なる特徴を持つ。珠文は薄くはっきりしないものや小さいものが多く、表面にはざらつきやひびが目立つものが多い。大型。(図12-30, 31)

田村新分類5式。田村氏も指摘しているように、全て同一範によるものと思われ、その他出土状況等の特徴からも、短期間の製作と考えられる。

- ⑫：珠文がなくなる。大型の他に中型や小型のものも比較的数量多く見られる。(図12-32, 33・図13-37)

田村新分類で6a式とされたものだが、氏は大型のもののみ扱っている。

- ⑬：珠文が薄くはっきりしないものがあり、表面の範の劣化による凹凸が目立つものが多い。大

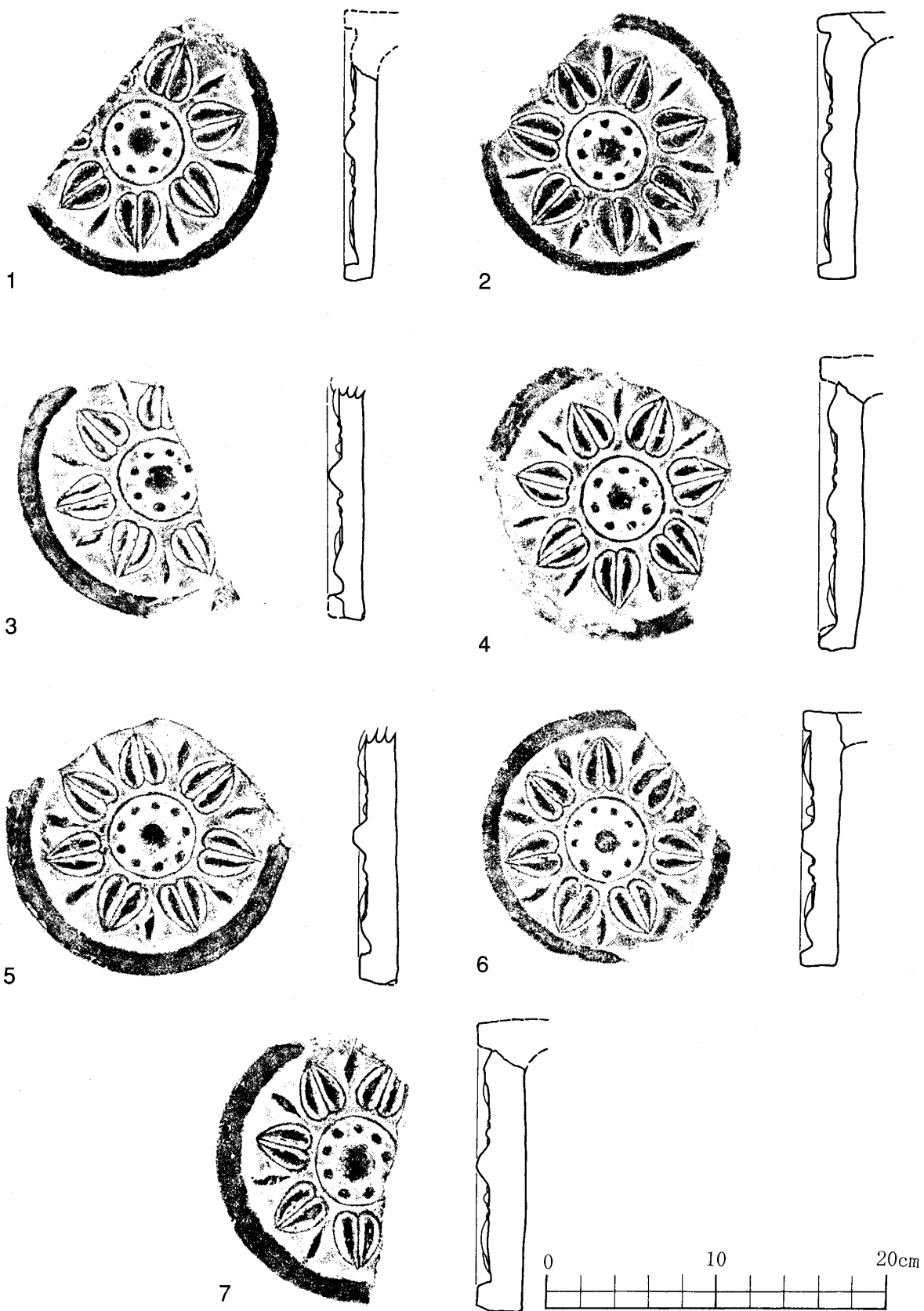


図6 軒丸瓦 A1, A2

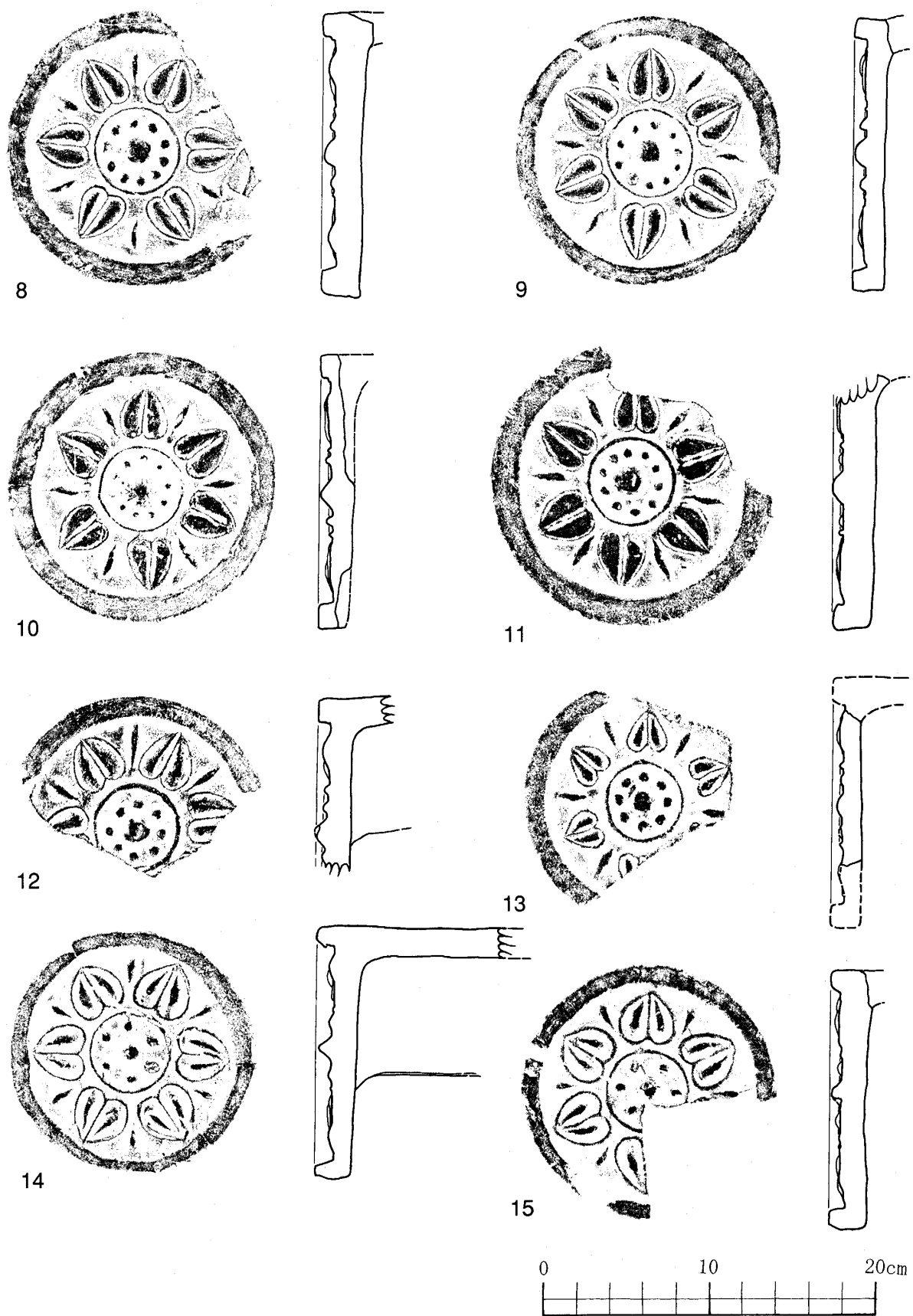


图7 軒丸瓦 A3, B1

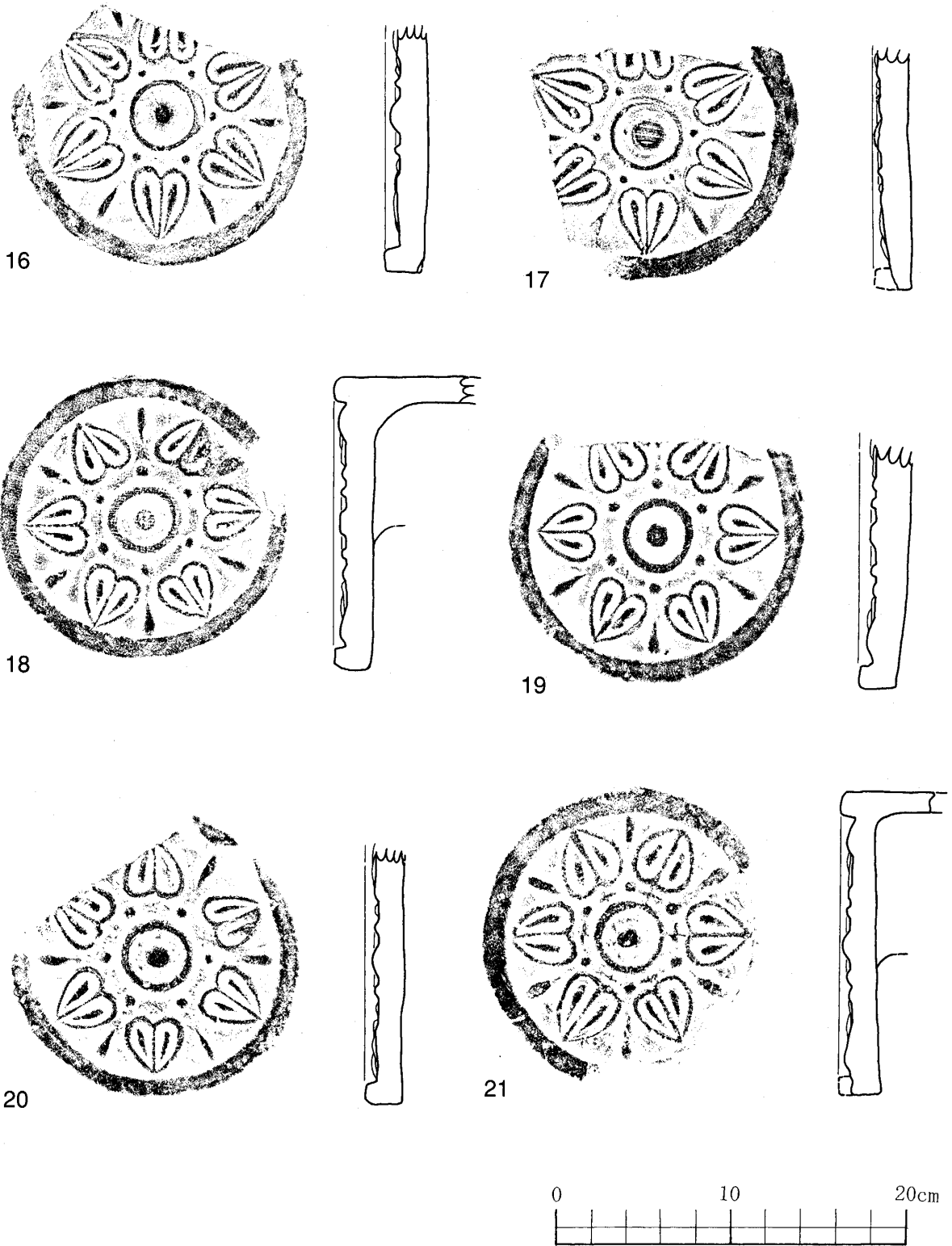


図8 軒丸瓦B2

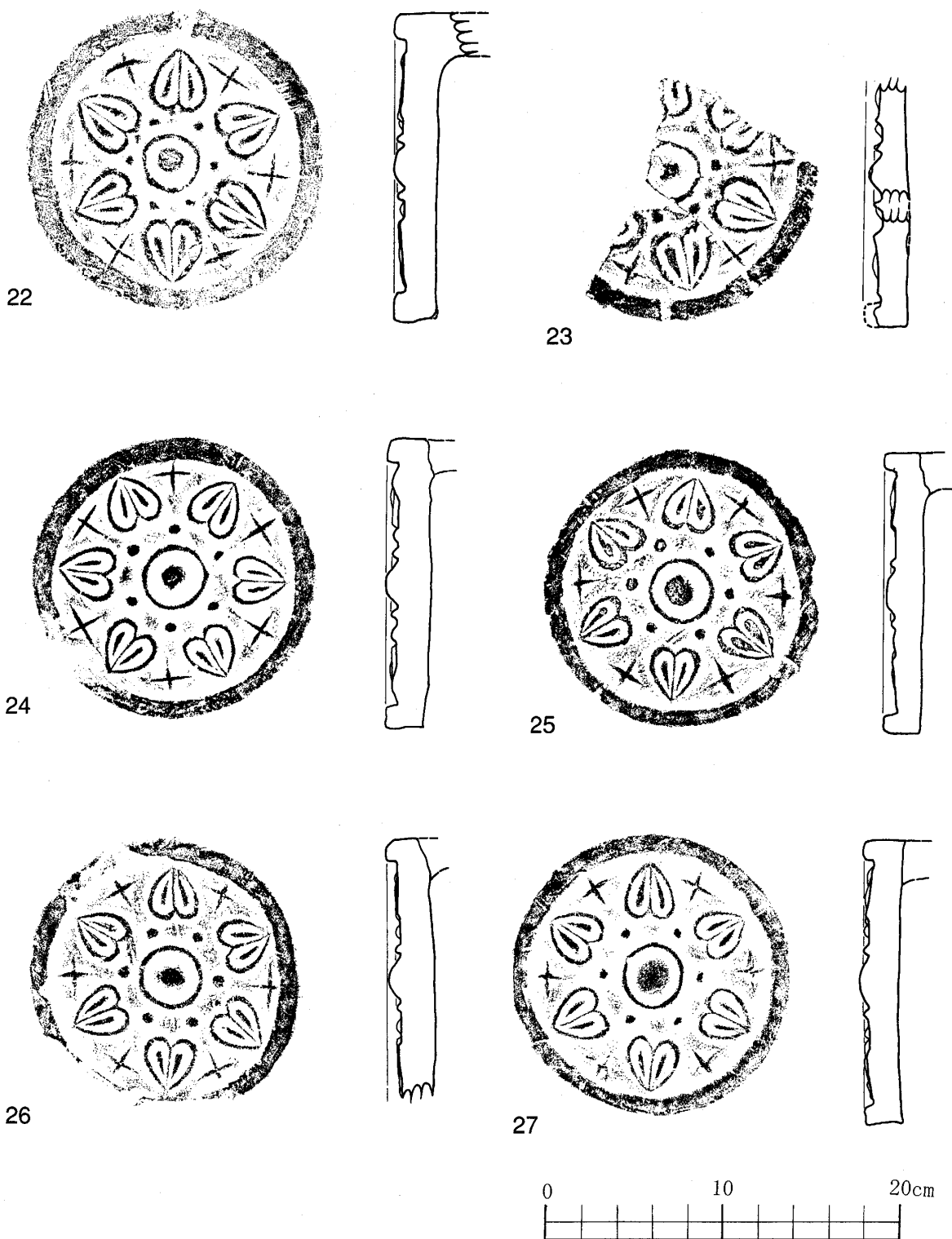
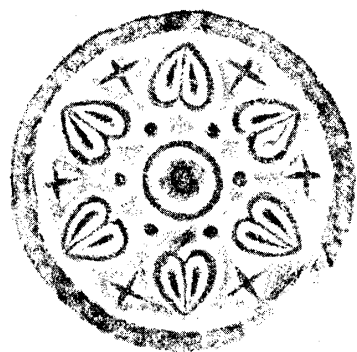


图9 軒丸瓦B3



28

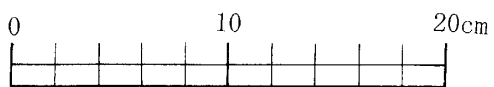
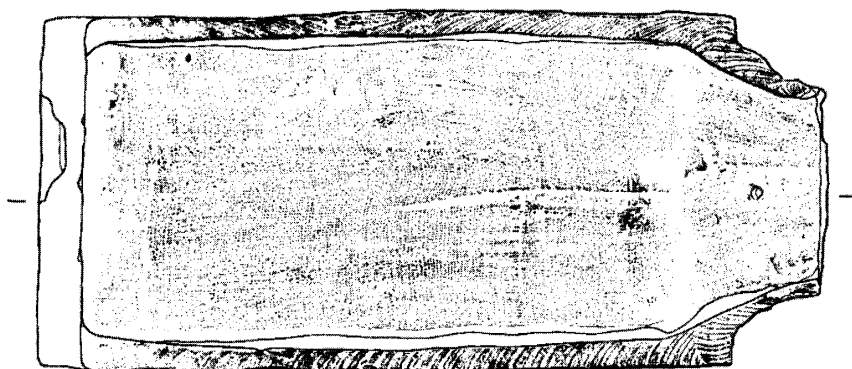
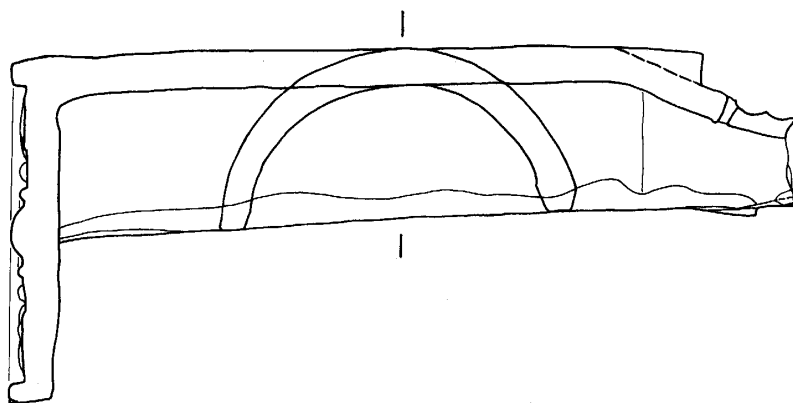
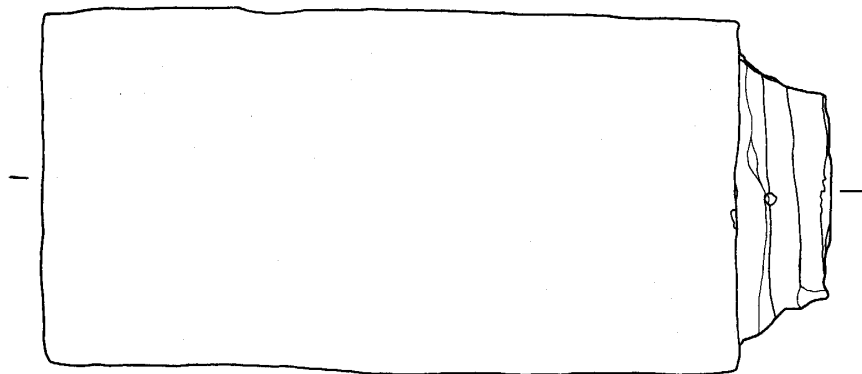


図10 軒丸瓦B3

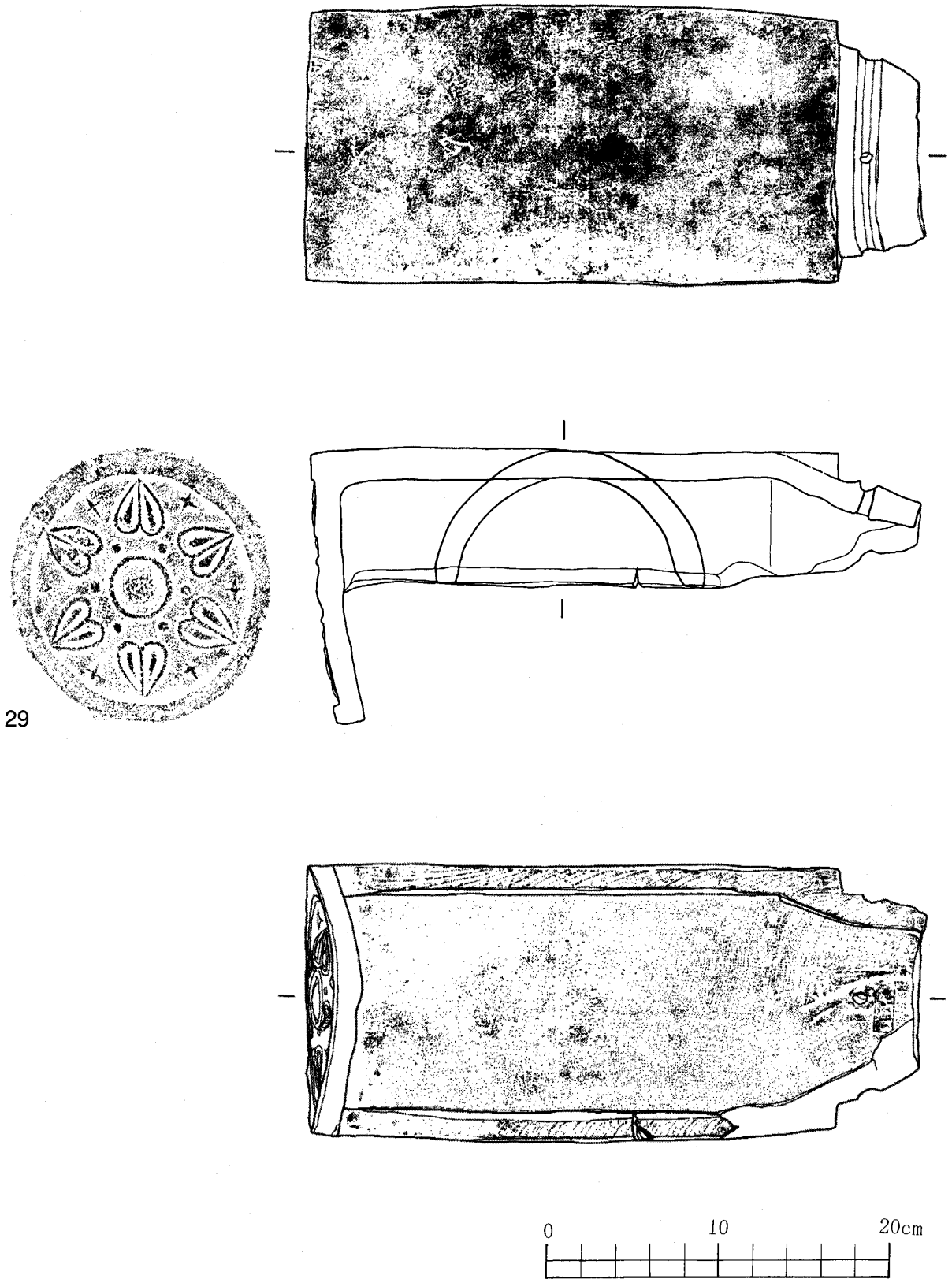


图11 軒丸瓦B3

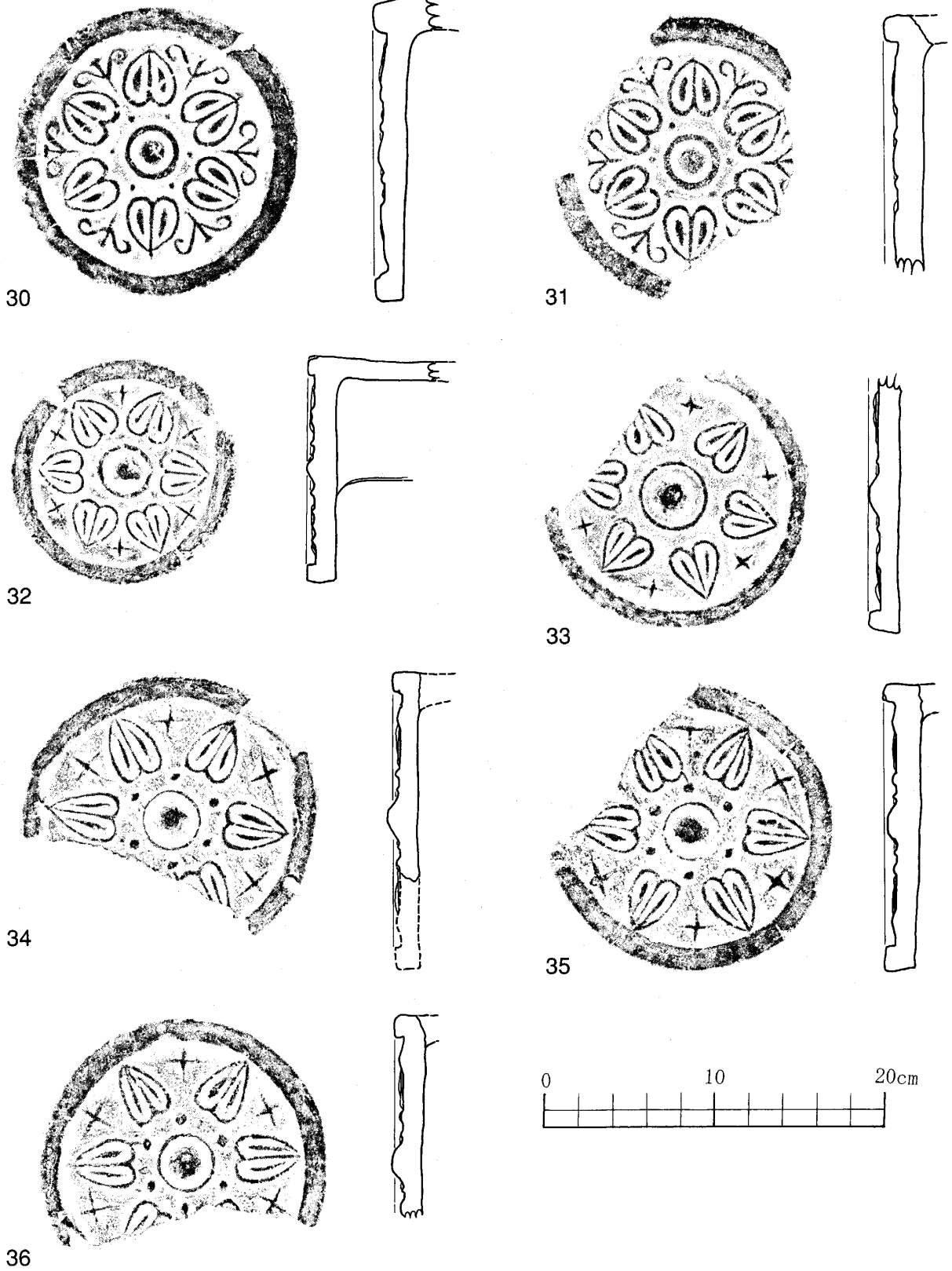


図12 軒丸瓦B4, B5, C1

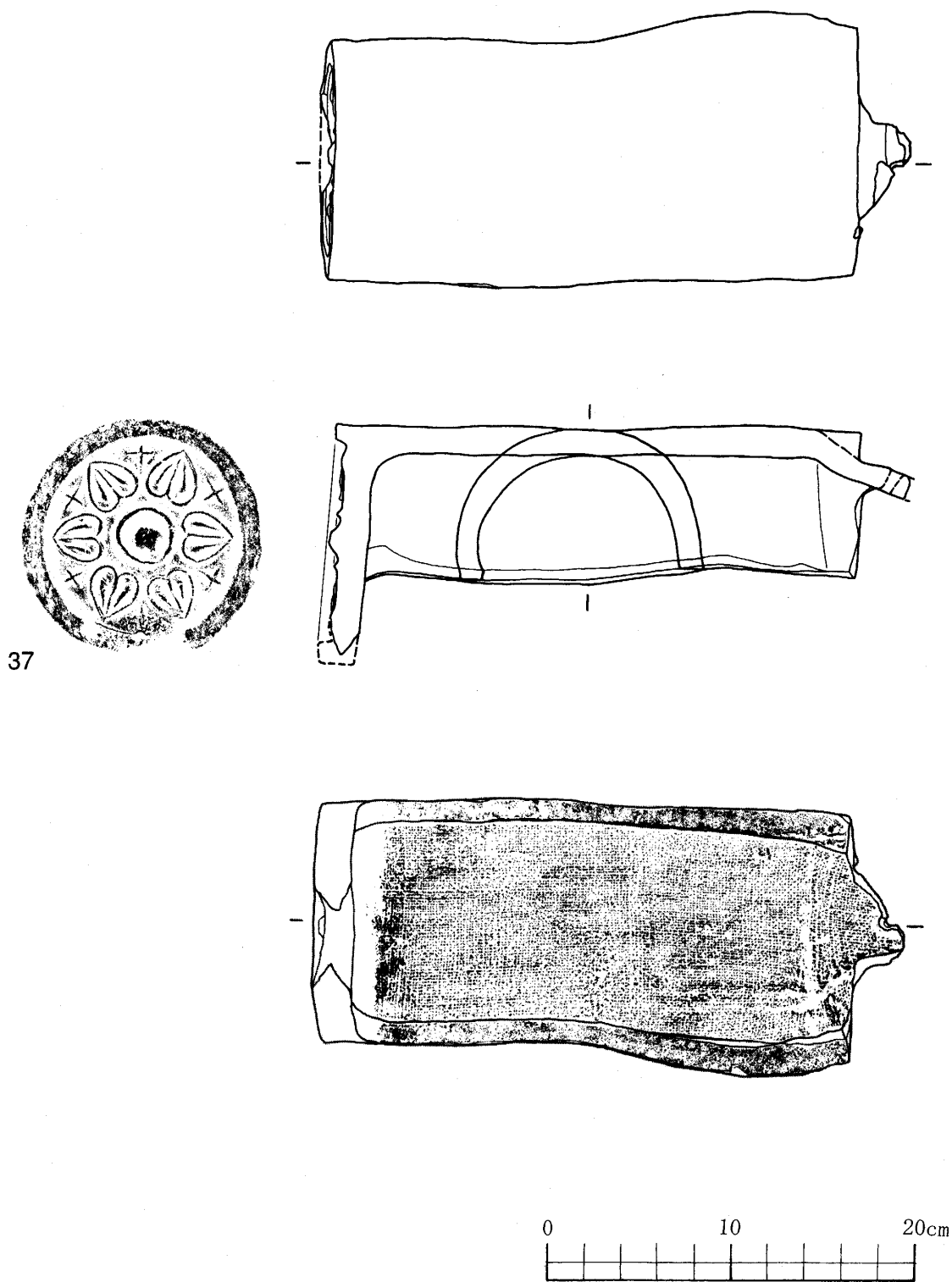


图13 軒丸瓦B5

渤海上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年

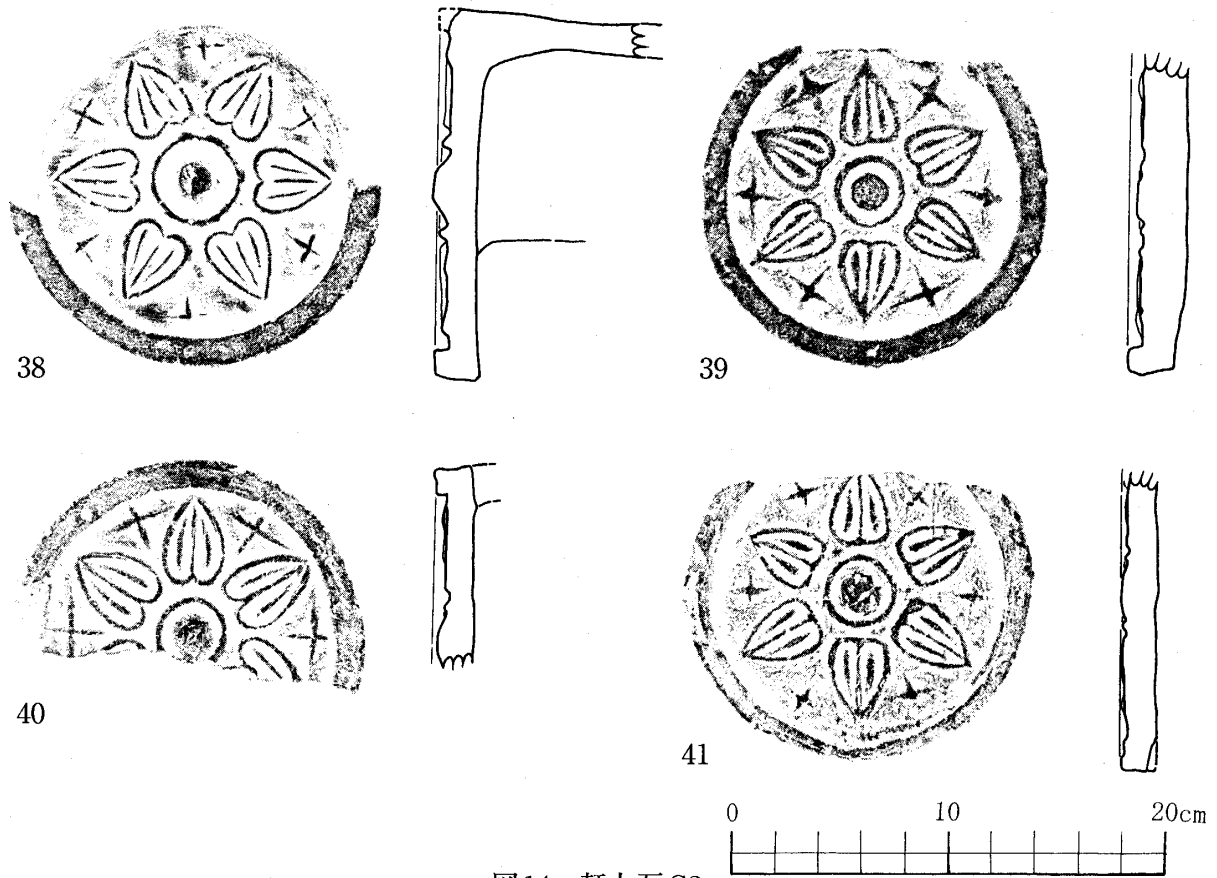


図14 軒丸瓦C2

付 表

番号	図版	渤海遺物台帳番号	仮分類	分類	番号	図版	渤海遺物台帳番号	仮分類	分類
1	図版 6	B.T.150-3-9	①	A1	22	図版 9	B.T.33-1	⑨	B3
2	図版 6	B.T.150-3-11	①	A1	23	図版 9	B.T.170-1-36,	⑨	B3
3	図版 6	B.T.150-1-8	②	A1			B.T.170-6-13~15		
4	図版 6	B.T.150-3-15	②	A1	24	図版 9	B.T.171-1-12	⑩	B3
5	図版 6	B.T.150-2-1	③	A2	25	図版 9	B.T.171-1-13	⑩	B3
6	図版 6	B.T.150-2-12	③	A2	26	図版 9	B.T.171-2-19	⑩	B3
7	図版 6	B.T.150-2-11	③	A2	27	図版 9	B.T.171-3-1	⑩	B3
8	図版 7	B.T.172-1-2	④	A3	28	図版10	B.T.175-5	⑩	B3
9	図版 7	B.T.172-1-7	④	A3	29	図版11	B.T.202-2	⑩	B3
10	図版 7	B.T.42-5	⑤	A3	30	図版12	B.T.202-1	⑪	B4
11	図版 7	B.T.172-1-1	⑤	A3	31	図版12	B.T.5-2	⑪	B4
12	図版 7	B.T.171-2-13	⑥	B1	32	図版12	B.T.41-2	⑫	B5
13	図版 7	B.T.169-2-9	⑥	B1	33	図版12	B.T.43-12	⑫	B5
14	図版 7	B.T.15-2, 33-18	⑥	B1	34	図版12	B.T.4-22	⑬	C1
15	図版 7	B.T.169-2-11	⑥	B1	35	図版12	B.T.4-37, 39	⑬	C1
16	図版 8	B.T.17-15	⑦	B2	36	図版12	B.T.171-1-8	⑬	C1
17	図版 8	B.T.174-1-19	⑦	B2	37	図版13	B.T.173-3	⑭	B5
18	図版 8	B.T.187-16	⑦	B2	38	図版14	B.T.41-1	⑭	C2
19	図版 8	B.T.174-1-17	⑦	B2	39	図版14	B.T.42-1	⑭	C2
20	図版 8	B.T.203-1	⑦	B2	40	図版14	B.T.42-7	⑭	C2
21	図版 8	B.T.203-19	⑧	B2	41	図版14	B.T.43-13	⑭	C2

型。(図13-34~36)

田村新分類4 d 式に該当。

⑭：胎土が砂粒を多く含むものが多い。殆どが大型だが、緑釉を施された小型のものも少数ある。
(図14-38~41)

田村新分類6 b 式・6 c 式・6 d 式。あるいは氏のように細分する必要があったかと思われるが、今回は便宜上分類しなかった。6 d 式はハート型という渤海独特のモチーフが形骸化しており上京龍泉府址最後の時期に作られたとする氏の意見に同意する。

ここまでの分類を見ていくとまず、大型品以外に以外に中型品や小型品といった法量分化のあるものは⑫と⑭のみ、つまり珠文を持たないものだけだということが分かる。

なお、この①~⑭の分類は筆者が考える文様の型式学的変化である。大筋は田村氏と同じように、珠文が円環の内側で、弁間飾りが紡錘形のもの古いものであり、珠文が円環外に出て弁間飾りが十字形などに变化するものがより新しいものとみなしている。なぜなら、蓮弁の肉部が具象的なものの弁間飾りは全て紡錘形の弁間飾りを持っているのに対し、弁間飾りが十字形や植物形のものより蓮弁が抽象的な肉部を持っているからである。また、7弁と6弁で同じような蓮弁を持つもの(筆者の①と④)はほぼ同時に存在したであろうということについても氏に同意する。しかし、珠文がないものの方が珠文が円環外に存在するものよりも新しいとする考えについては、蓮弁の形態や膨らみ等の特徴を考えると単純にそういきることはできない。前述の理由から、珠文の有無よりも蓮弁の形態差を優先する分類を行った。Cグループの蓮弁はBグループの蓮弁に比べ蓮弁の肉部がより抽象化されて線状になり、輪郭線とほぼ様相を同じにしているため、これが型式学的に最も新しいものとみなせるわけである。

また、これらの瓦当とは別のタイプの瓦当が少数存在するが、編年を考えるにあたって直接的な影響はなく、今回は紙面の制約上割愛することとする。なお、これらのものは田村氏の論文で小型瓦当として紹介されているものがほとんどであり、その特徴は田村氏が言及しているように、中心飾りが省略されたものが多い。

3-2 製作技法による分類

以下ではまず、大脇潔氏の『研究ノート 丸瓦の製作技法』(大脇 1991)を参考として丸瓦・軒丸瓦の製作技法を考察し⁵⁾、2005年に発表された清水信行氏の『渤海上京龍泉府址出土の平瓦・丸瓦』(清水 2005)における丸瓦の製作技法を検討していこうと思う。なお、清水氏は上記論文において上京龍泉府址出土の丸瓦の中に行基式のものがある可能性を述べているが、上京龍泉府址からは東亜考古学会調査、日朝合同調査、その後中国によって行われた調査のいずれにおいても行基式の丸瓦の報告例がないため、今回は玉縁式のもののみを対象とする。

(1) 丸瓦部の製作

・摸骨

上京龍泉府址出土の軒丸瓦・丸瓦の玉縁凹面と胴部凹面には全面に布目が確認できる。このことから上京龍泉府址出土の軒丸瓦・丸瓦は全て円筒形の芯、即ち摸骨を用いて作る摸骨巻き作りであるといえる。丸瓦の凹面は布目や布の撚れによる凹凸以外の凹凸は特に見られないが、摸骨に生じたひびが原因と思われる凹凸が瓦の凹面に観察されることがたびたびあるため、おそらく摸骨は木製の一本作りであり、形状は截頭円錐形であったと思われる。調整の際に回転を利用したナデが見られるため、上京丸瓦の摸骨の内部にも回転軸を受ける受け穴があったと想定できる。おそらく大脇氏の論文に例示されている〈瓦宇〉蔵の摸骨のようなものだったのだろう。また、丸瓦の凹面では玉縁の端まで布目が確認され、摸骨が途切れた形跡は見られない為、摸骨のほうが実際の丸瓦よりも長く作られていたようである。また、清水氏が述べているような、布上部に取っ手状の紐がつけられていたかは不明であるが、布が玉縁の外に出るだけの長さがあれば、そこをつかんで取り出すことも可能と思われる。

・布目

摸骨の上には、成形し終えた瓦を摸骨から外しやすくするために袋状の布を被せている。この袋状の布は恐らく円周+縫い代分の幅を持つ一枚布を半分に折り曲げて縫ったものなのであるが、玉縁部の凹面や胴部凹面の玉縁に近いほうでは縫い目が確認されるのに対して、胴部の広端面に近いほうでは縫い目が確認されない。これは布袋を摸骨から着脱させやすいように裾を縫わなかったことによるものと思われる。実際、布袋を摸骨にきちんと被せなかったからか布が裾部分でめくれてしまい、布目がついていない部分をもつものも若干数見られた。また、この布袋は玉縁部分、つまり摸骨が区切れて円筒形から円錐形に変わった部分より上の部分では布がきちんと摸骨に沿うように、逆三角形の襷（ダーツ）をとって縫われている。このダーツの縫い目は一つの丸瓦において1～2本見られることから、恐らく摸骨一本につき3～4本のダーツをとって縫い縮めていたものと思われる。縫い代やダーツの部分の布は片側に倒されているため、布の厚みが出てくることとなり、丸瓦の凹面にはその部分が凹んで観察される。この布の素材が何であるのかは筆者には分からないのだが『六頂山与渤海鎮』では麻布であると述べられている。布目は2×2cm角の中に縦・横共に15目前後のものが多く、あまり目の細かくない布であることが分かるが、緑釉がかけられた胎土が褐色の丸瓦の中には時折20～25目のやや目の細かい布を用いた痕跡が見られるものもあった。また、布は何度も再利用されたと思われ、劣化して布目が歪んだり広がったりしたものも多々見受けられた。

・粘土紐

渤海上京龍泉府址出土の瓦の素材は粘土板ではなく粘土紐で作られており、このことは既に『六頂山与渤海鎮』等でも述べられている。清水氏は、丸瓦が主に粘土板によってつくられたように述べているが、瓦の凹面にしばしば粘土紐の継ぎ目が確認されるものの、粘土板作製時の糸きり痕が確認された例はない。なお、この粘土紐の継ぎ目は主に広端面付近や摸骨の玉縁部付近で多く見ら

れるが、これはそれらの部分が叩きしめを行いにくかったからだと思われる⁶⁾。粘土紐のつぎめはおよそ3～4 cm間隔で観察されたが、この粘土紐は、手頃な長さのものを適宜継ぎ足しながら摸骨の周りに巻きつけていき、玉縁部分の下側には肩部を成形するためにさらに粘土紐を継ぎ足している。この肩部は胴部の他の部分よりもやや膨らんでいたり、剥脱してしまっていたりするケースが多く見られる。

・叩きしめ

上京龍泉府址出土の瓦は表面にナデが施されているために叩きの痕跡を観察することは難しいが、ナデが不十分なために叩きの痕跡が見られるものについては全て縄目であり、渤海でも縄巻き叩き具が用いられていたことが分かる⁷⁾。

この叩き具の縄目は比較的細かいものである。縄目が瓦の長軸方向にほぼ平行に施されており、叩きの単位から観察すると、叩き具は短辺と平行に縄を巻いた羽子板状の板であって、手の位置を上下に移動させながら叩き具をほぼ水平にして叩いていたと思われる。

・ナデ調整

前述のように、叩きしめの痕跡は入念なナデによりなで消されている。ナデは長軸方向にヘラ状のもので施した痕跡や回転を利用して横方向に施した痕跡等が確認できる。ヘラ状のナデが目立つものはやや粗雑に作られた感があるのに対して、回転のナデを念入りに行っているものは表面全体が非常に滑らかに調整されている。

また、上からの圧力の為に胴部の広端面付近が厚さが厚くなりやすいからか、厚さを揃えるために表面を削っているものも見られた。

・肩部及び玉縁の成形

以上の摸骨や粘土紐等の観察からすると、上京龍泉府址出土の丸瓦は大脇氏の玉縁の成形法の分類でいうC1手法(図15)に近いが、若干の違いも認められる。図のように大脇C1手法において丸瓦の玉縁は長軸方向と平行に付いているが、上京龍泉府址丸瓦の玉縁はやや内側に傾いて付けられている。この違いは摸骨の形態の違いによって生じたものである。摸骨に注目するとC1手法の摸骨は胴部から玉縁部に移る部分において内湾する緩やかなカーブを描いており、それより上の部分では胴部と平行になるように作られている。一方上京龍泉府址出土丸瓦の摸骨は玉縁部分でほぼストレートに斜め上方向に延びていき、丸瓦よりも摸骨のほうが長い(図16)。よって玉縁部は必然的に摸骨に沿って傾斜するようになっているのである。よって、肩部及び玉縁部の成形は大脇氏の述べるものとは若干違いが生じてくる。

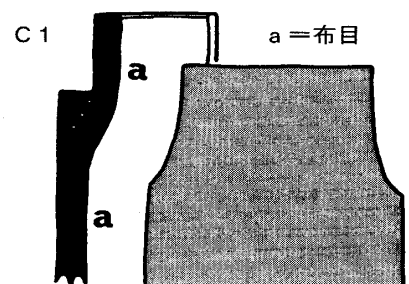


図15 大脇C1手法

大脇氏は前述の論文において、肩部を作り出す時の「型板」の使用について述べている。ここで図示されている型板は肩部を整えるのと同時に玉縁の溝(おそらく水切り用)をも同時に作り出す

渤海上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年

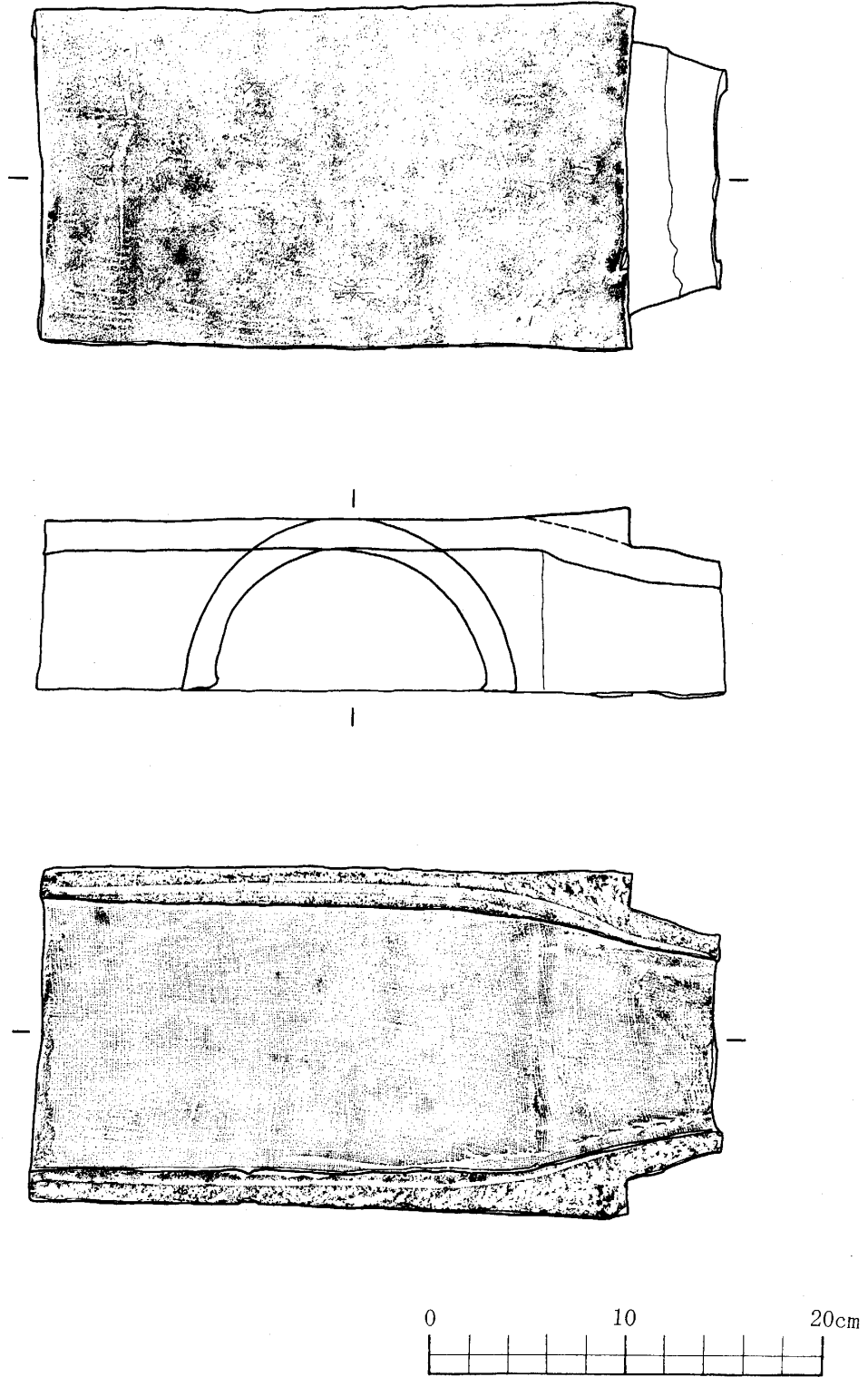


図16 丸瓦 (B.T.123-1)

働きをしている（図17）。上京龍泉府址出土の丸瓦も肩部が直角に作られていることを見るとその成形に型板を用いていることは明らかである。そして、上京龍泉府址の丸瓦にも玉縁部に溝を持つものは多数存在する。しかし、この溝は明らかに型板によって作られたものではない。では肩部と玉縁はそれぞれどのように作られたのであろうか。

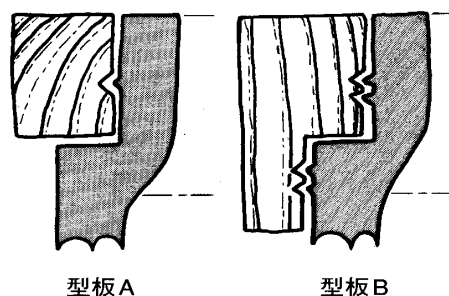


図17 肩部整形

まず肩部の観察からはじめると、肩部に用いた型板は、上京龍泉府址の丸瓦の肩部が美しい直角であり、また胴上部に型板を引きずったような痕跡を持つものがあることを考えると、大脇氏の型板Bのように胴上部までをカバーしたものであったであろう。（上京龍泉府址のものには溝はない。）肩部上面に木目による筋が複数見られるように、型板の素材は木であった。直角の窪みを持つ木材の直角部分を未完成の丸瓦の肩部に押し付け、回転を利用して均質な肩部を成形したと思われる。

一方玉縁部はやはり回転を利用して整えられているが、観察からすると押し当てていたものは型板ではなく恐らく手であったと思われる。玉縁の幅が5cm前後だということを考えると、焼成によって多少縮むことを考慮しても、掌で玉縁を押さえて回転させたというところであろうか。溝もやはり回転によって作られており、こちらは幅からすると指を強めに押し付けて回転することによってつけたものであろう。溝の箇所は個体によってややばらつきがあり、溝の幅には大きく分けて人差し指サイズとやや大きめの親指サイズの2種類がある。

また、丸瓦の中には田村氏や清水氏が言及しているように、玉縁部に文字が彫りこまれたスタンプを押してある所謂「押印瓦」が存在する（田村 2005b・清水 2005）。このスタンプは清水氏が述べているように玉縁が整えられた後まだ粘土が乾かないうちに押されている。文字には数種類があり、文字の種類と溝の有無等に一定の対応関係があることが予測されるが、今回は丸瓦の全資料を見終えておらず、また、この「押印瓦」は平瓦にも多く見られるものであり両者を検討する必要があるため、今回は詳しく言及しないことにする。また、この「押印瓦」については田村氏が先の論文で詳しく論じている。

・摸骨から外す

筒状の丸瓦ができたところで丸瓦は布ごと摸骨から外される。粘土が引きずられた痕跡を見ると、清水氏が述べているように、布は玉縁側から引き出されたと思われる。また、中には布を外した後凹面の広端縁付近や玉縁端面を削るなど手を加えているものもある。

・粘土円筒の分割

この段階で軒丸瓦の丸瓦部と丸瓦では製作技法上の違いが見られるようになる。軒丸瓦の完形品は特に少ないため製作技法がこれだけであるとは言い切れないのだが、今回の観察から分かった範囲で説明していきたい。

①丸瓦

丸瓦の分割は、まだ粘土が乾ききらないうちに凹面側に鎌状の工具で浅く分割截線を入れ、乾燥後に凸面側から力を加えて分割している。この分割截線の入れ方は大きく2種類に分けることができる。

まず一つ目の手法は鎌状工具で広端面から玉縁端面まで一気に分割截線を入れる手法である（図18-I）。この手法の場合、鎌状工具を引く速度や力の入れ具合の問題から、分割截線は胴部中ほどでもっとも幅広となり、逆に凹凸のある玉縁部分との境目以上では細くなる傾向がある。中には分割截線が玉縁端面に達していないものも多く、叩いて分割する際に肩部から玉縁部分にかけての部分がきれいに割れずに破損しているケースが多々見られる。また、丸瓦の分割截線は目分量で引かれていたと思われ、配分に失敗して分割截線を何度も引きなおしている例も見られる。

二つ目の手法は、まず玉縁部分の凹面に分割截線を入れてしまい、次に広端面から入って肩部のところで凸面側に出るように分割截線を入れる方法である（図18-II）。この分割截線を二回に分けて入れる手法の利点として、上から見やすい玉縁部の分割截線を入れることが二分割の目安となり、広端面から玉縁部まで一気に分割截線を入れるよりも失敗しにくくなるということがあげられる。さらに、粘土の厚みが一番厚い肩部において工具を貫通させて分割截線を通すことによって、叩いて割る時の失敗による破損を防げるということもあげられる。

これらの分割截線を入れた工具については先ほど「鎌状の工具」と述べたが、肩部で貫通せずに工具の形態の痕跡を残すものの観察からすると、工具の先端は鎌のように尖ってはおらず平らであり、むしろL字形定規状の工具を想定したほうが良いかもしれない。いずれにせよ、分割截線は広端面から玉縁端面に向かって入れられているとすれば工具の柄の部分は長いものでないと手が届かなかったと思われる。これらふたつのどちらかの手法を用いて分割截線を入れられ乾燥して分割されたときに生じた破面（割れた状態の面）は調整等を施されずにそのまま焼成されている⁸⁾。

②軒丸瓦

軒丸瓦は前述のように完形品の数が少ないものの、筆者が今回観察できたものは全て糸切りによって分割されたもの（図18-III）、もしくはその後に調整を行いその痕跡を消してしまったと思われるものであり、破面のあるものは見られなかった。後で詳しく述べるが、軒丸瓦の大部分は瓦当部と丸瓦部を接合する際に、その粘着力を強化するために丸瓦胴下部の凹面・凸面両側から瓦当裏面にまで達するようにヘラ状の工具等で突き刺している（これを「刺突状カキヤブリ」と呼ぶ）。よって軒丸瓦の丸瓦部は丸瓦のように乾燥してから二分割するのでは間に合わず、まだ粘土が軟らかいうちに分割してしまう必要があったのでこの手法が用いられたと思われる。糸の動きは、丸瓦の片側面外→内側→もう片側の外側へと動いているものが多いように思われるが、糸切痕がなで消されたりしていることが多く、また、多少複雑な痕跡を残すものも多いため詳細はわからない。また、時折玉縁凹面にのみ丸瓦と同じ工具による分割截線が見られることがある。これもおそらく糸

切りの目安となるように入れたものだろう。さらに、側縁の面取りを行っているものも多く、これも凹面側・凸面側の両面に施しているものと片方にのみ施しているものがあった。

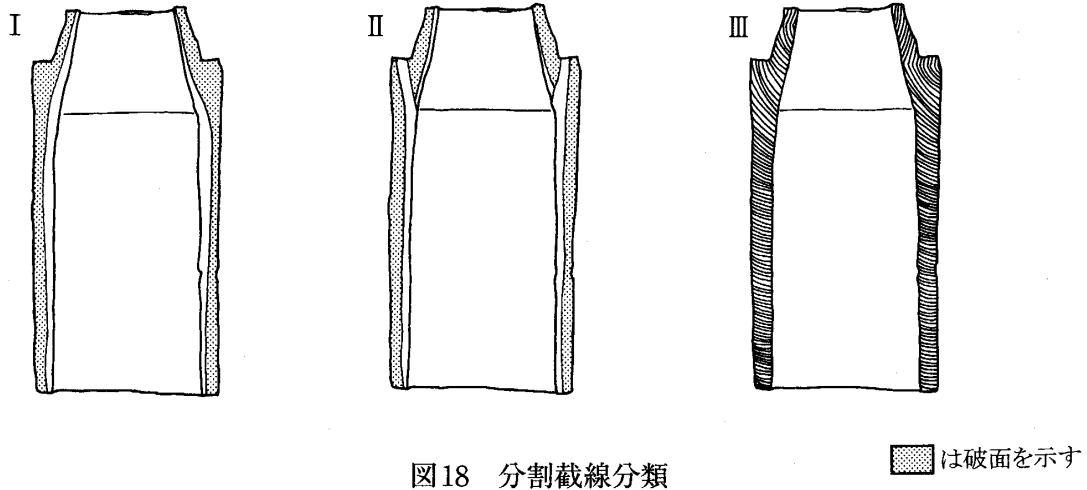


図18 分割截線分類

(2) 瓦当部の製作

軒丸瓦の瓦当部は普通瓦当箆を用いて製作されるものである。上京龍泉府址出土の瓦当部の中にも、田村氏が詳しく述べているように(田村 2005 a), 同じ箇所の特徴的な傷を持つことによって同箆瓦当であると確認できるものが多数見出され、その製作において箆を用いていたということは疑う余地がない。しかし、現在まで上京龍泉府址などの渤海遺址から瓦当箆が出土したという報告はなく、その素材や形態についてはよく分かっていない。そこで本稿では、同箆瓦当の観察から、瓦当箆及び軒丸瓦瓦当部の製作技法について考えていきたい。

①瓦当箆の材質

瓦当箆の実例は日本においても、また中国や朝鮮半島においても非常に少なく、有機質で後世に残りにくい素材、即ち木で作られていたと考えることが妥当である。しかし、わずかではあるが、千葉県栗源町のコジヤ遺跡(齋木 1987)や韓国慶州皇龍寺址から土製の瓦当箆が出土しており(濱田 1934・近藤 1982)、中国では古代の滑石製の瓦当箆が知られている。最近では韓国で統一新羅の土製箆が10点報告されている(国立慶州博物館 2000)ので、渤海にもこのような箆が存在したとしても不思議ではない。

上京龍泉府址出土の瓦当部の表面には木目と思われる線が見られる資料が多くあることから木製の箆が少なくないと考えられる。しかし全ての瓦当面にそういった特徴が見られるわけでもない。また、今回の観察資料の瓦当の中には同箆と思われるものが非常に多いため、あるいは母箆(瓦当と模様の凹凸が同じ箆)を作り、母箆を粘土に押し付けて複数の土製の子箆を作ったという可能性もあるのではないかと考えた。しかし、実物が出土せず想像の域を超えないので今回は母箆と子箆という考えは論じない。

第2表

BT	出土地点	瓦当径	瓦当厚さ	周縁高さ	周縁幅	瓦当側面	裏面
170-24			1.4	0.8	0.8	ヘラケズリ	無
170-28			1.7	0.6	1.2		無
171-1-01	V 東突角	15.8	1.6	0.7	0.9~1.2	周縁下ヘラケズリ	縁ヘラケズリ
171-1-05	宮V 北角	15.7	1.4	0.7	0.8~1.4	ヘラケズリ	縁ヘラケズリ
171-1-06	宮V 西突角西	15.6	1.5	0.8	0.7~1.2	周縁下ヘラケズリ	無
171-1-07	V 西突角	15.8	1.8	0.6	0.9		
171-1-10		16.0	1.5	0.8	1.0	周縁下ヘラケズリ	無
171-1-11	購	15.5	1.1	0.9	0.9~1.1	ヘラケズリ	無
171-1-12	宮V	16.0	1.4	0.8	1.0~1.3	周縁下ヘラケズリ	縁ヘラケズリ
171-1-13	宮V 西突	15.5	1.5	0.8	0.8~1.3	周縁下ヘラケズリ	無
171-2-14	IV (朱書き)		1.3	0.7	1.0	周縁下ヘラケズリ	無
171-2-19	宮VI 東側	15.7	1.6	0.7	0.9~1.1	ヘラケズリ	縁ヘラケズリ
171-3-1	宮V 東北突角	16.1	2.4	0.2	0.9~1.2	ヘラケズリ	ヘラケズリ
176-1	東突	16.0	1.6	0.6	0.8~1.0	周縁下ヘラケズリ	ヘラケズリ
187-13		16.2	1.5	0.7	0.8~1.1	ヘラケズリ	縁ヘラケズリ

②瓦当範の形態

ここでは主に同範と思われる瓦当及び瓦当片計15点（第2表）の観察と比較から瓦当範の形態を考えていくこととする。

まず、表2から分かるように、径は16cm前後であるが、バラツキがあることから、個体によって焼成時の収縮に差があるとしても、範によってきちんと周縁の端までが決められいたとは考えにくい。さらに周縁幅は瓦当部と丸瓦部を接合する時に若干つぶれる可能性があるとはいえ、一個体の中での部分による差が出てくるので、やはりこれが範にはめて作られたとは考えにくく、むしろ大体の幅を揃えた粘土紐で範に沿ってめぐらしていったと考えるほうが妥当ではないか⁹⁾。周縁の高さの若干の差は接合時につぶれたことが原因と思われるが、一点のみ高さが0.2cmしかないのは、この瓦当を作る際に周縁部に先に粘土を入れ忘れたことが原因かと思われる。

以上のことから図19のような瓦当範が想定されるわけである。なお、この形態は前述の統一新羅の瓦当範をモデルとしたものだが、渤海の軒丸瓦の周縁部の欠損状態を考えると、周縁も瓦当部と

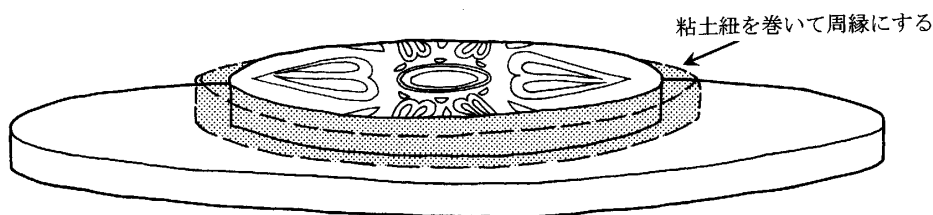


図19 瓦当範予想図

一体で作られているということが分かるため、上京龍泉府址の範の段差は周縁を成形する際に用いたためのものと考えた。

③瓦当部の製作

上記のような瓦当範を想定した上で瓦当部の製作技法を考えると、次ページのフローチャート1のような製作手順が考えられる。

4や5に関しては、軒丸瓦の表面部分が剥がれ落ちてしまっているものが複数見られたため考えたものである。また、6に関してはさらに瓦当裏面の縁部分をヘラケズリしているものなどもあり、瓦当裏面の状態は、他にも押さえたときの指痕が残るものや滑らかに平らなものなど様々な特徴を持つものがあつた。

瓦当部に見られる様々な痕跡には他にも筆者には理解し得ないものが多くあり、瓦当範が図19のようなものだけであつたとは決して断言はできない。よつてこの瓦当部の製作技法はあくまで筆者による一案である。

(3) 接合

上記のように作られた丸瓦部と瓦当部は接合されることによつてようやく軒丸瓦となるのだが、上京龍泉府址出土の軒丸瓦にはこの接合が甘いために瓦当部が丸瓦部から剥がれ落ちて見つかることが多い。ではこれらはどのようにして接合されていたのだろうか。丸瓦部から剥がれ落ちてしまつた瓦当部の裏面を観察すると、線状のカキヤブリ、刺突状のカキヤブリ、粘土継ぎ足し、といつた主に三段階の接合法が見られた。

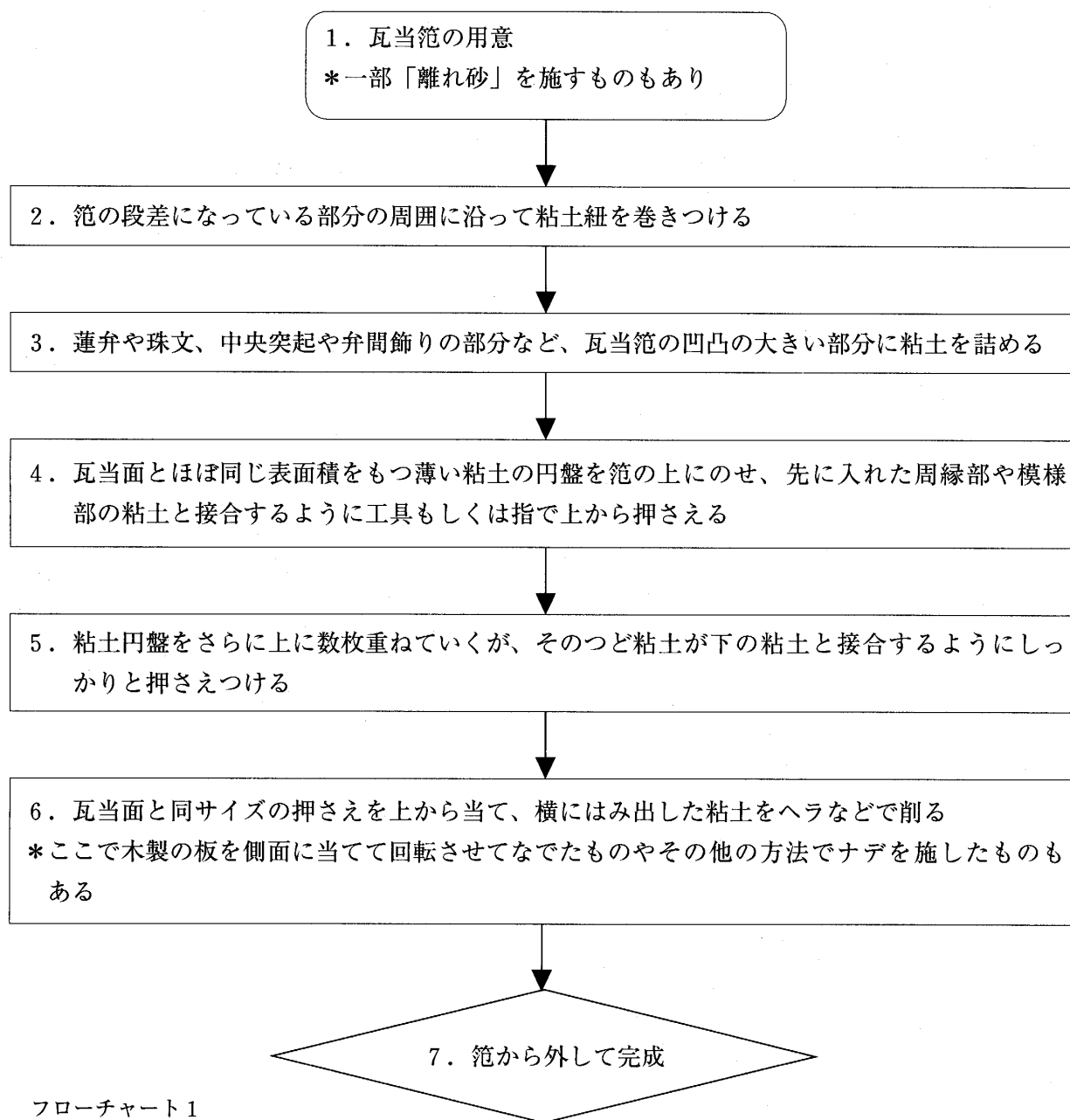
①線状カキヤブリ

この「カキヤブリ」とは、瓦当裏の丸瓦部を接合する部分に工具で刻みをつけることによつて接着面積を広げ、剥がれにくくする役割を果たしているものである。上京龍泉府址出土の線状カキヤブリは複数の線が等間隔に平行して走っているため、フォーク状の工具で施されたものと思われる。線状カキヤブリは同心円状の平行線を半周描いて一気に施すものや、直線の線を複数回に分けて円状に引いたものなどがあつた。このような線状のカキヤブリは高句麗の瓦にも見られるが、東京大学収蔵の集安や平壤出土の高句麗瓦当を観察する限りでは渤海のものとは線の方向が異なり放射状に施されているものが多いようであつた。上京龍泉府址出土の軒丸瓦は、接合面が観察できたものについては全てのものに円状の線状カキヤブリが施されていた。

②刺突状カキヤブリ

瓦当の接合部分には上記の線状カキヤブリのほかに、刺突痕跡が見られるものも多数あつた。このような痕跡は丸瓦部の割れた面にも観察でき、これが、まだ柔らかい丸瓦部を瓦当部にのせ、胴下部数cmのところの凹面・凸面両側から瓦当裏面にまで達するように工具を突き刺して刺突した痕跡だということが判明した。この刺突状カキヤブリの痕跡は線状カキヤブリが施された痕跡の上に内外の二列に半円を描いて観察される。用いられた工具は先がナイフ状に尖つたヘラ状のもの、先端が円錐形の棒状のものがある。この痕跡も粘土の剥がれ具合によつては観察が非常に難しいも

渤海上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年



のもあったが、中には明らかに施されていないものも見られた。この刺突状カキヤブリは、管見によれば同時代の周辺地域には認められない技法である。ただし、谷豊信氏が大王陵出土の瓦当として挙げている中の一点にこれに似ていると思われる刺突痕を持つものがある（谷 1989）。しかし、谷氏が「他の瓦には見られない類の製作の痕跡」として挙げている事も併せて考えると、この技法が高句麗の造瓦技法において一般的なものではないということが明らかである。

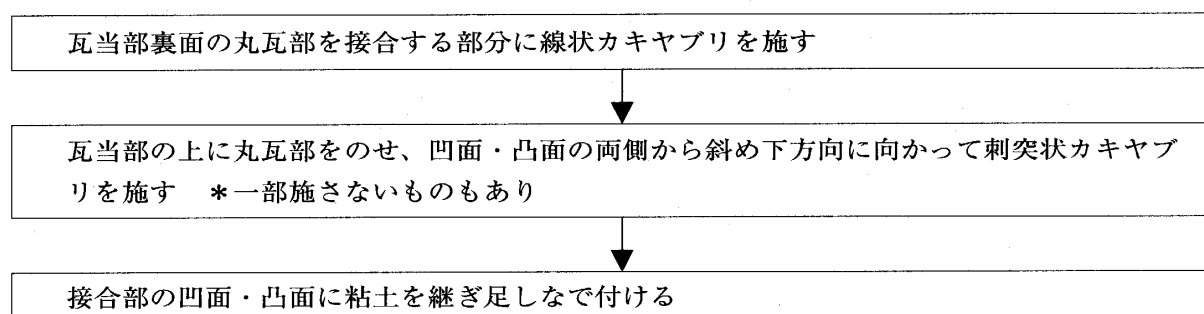
③粘土継ぎ足し

これはその名の通り、接合部の凹面・凸面両側に粘土を継ぎ足したものである。全ての軒丸瓦に認められたが、継ぎ足された粘土の量はものによってかなりの差があった。また、粘土の継ぎ足し

には丸瓦部と瓦当部の接合という直接的な役割以外にも、刺突状カキヤブリによってあいた丸瓦胴下部の穴をふさぐという間接的な役割があったようである。継ぎ足しに用いられた粘土には、瓦本体の粘土よりも砂の含有量が多いものが目立った。

さて、三段階の接合法について説明したことによってそれらの手順についても大体察しがつくのだが、ここで簡単にまとめる。

また、軒丸瓦の丸瓦部には一部布目痕が長軸方向になで消されているものがあったが資料が少ないため詳しいことは分からなかった。



フローチャート 2

(4) 乾燥と焼成

成形が終わった瓦は乾燥させた後に窯で焼かれる。渤海の瓦は一般に還元焰焼成の灰色のものが多くといわれるが、部分的に褐色味を帯びるものも含め、褐色系のものも決して少ないとはいえない。中には高句麗の瓦にも見られるような鮮やかなオレンジ色の瓦も存在する。しかし、上京龍泉府址が存続した年数を考えると瓦の色の流行によって葺き替えをしていたと考えることは難しい。おそらくは窯の性能が悪いために色々な色調の瓦が産出され、それらを葺いた当時の建物の屋根は単色ではなくまだらな色を呈していたのではないだろうか。

(5) 製作技法による分類

上記で紹介したような製作技法によって分類するにあたって、本当ならば軒丸瓦の玉縁の特徴や押印の文字の種類、丸瓦部側面の状態などといった丸瓦部に見られる特徴も見ていきたいのだが、これらは軒丸瓦の完形品が少ないために今回は行うことができない。そこで、今回は製作技法のうち瓦当でのみ判断できるものを分類基準とする。以下では主に上記で提示した瓦当製作時の過程で生じた痕跡を詳しく分類していく。

①瓦当側面の状態

瓦当側面の状態は大きく分けて次の四種類に分類できる。ただし、この痕跡は丸瓦部との接合部分ではナデ消されており見ることができない。

ヘラケズリ：側面がヘラ状の工具で削られており、その単位が確認できる。

横ナデ：指もしくはヘラ状の工具で横方向になでられている。

回転ナデ：幅 3 mm ほどの木目を持つ工具をあてて回転を利用してなでている。

見られず : 表面が粗い, もしくは特に何の痕跡も見られない。

②瓦当裏面の状態

瓦当裏面の状態は, 丸瓦部接合時のナデによって消されることが多く観察が困難な場合があったが, 主に以下のような特徴を持つものに分類できる。

粗い : 表面が毛羽立っており, 粘土カスの付着も多い。特別な調整の痕跡は見られない。

多方向ナデ : 指もしくはヘラ状の工具で多方向にナデが施されている。表面が滑らかに均されている。

ケズリ : 不規則にヘラケズリが施されている。

渦巻状 : 幅3mmほどの木目を持つ工具で中心から渦巻状のナデが施されるか, もしくは明らかにこれと同じ工具を用いてナデが施されているもの。上から多方向ナデで消されている場合もある。用いた工具は側面の回転ナデと同じ工具である可能性がある。同じような痕跡が統一新羅の瓦にも見られる。

縁ヘラケズリ : 縁に沿って幅3~4cm程をヘラケズリしている。中央部は多少の凹凸が見られるが, 特に調整の痕跡は見られない。

見られず : ナデやケズリの痕跡は特にないが, なめらかである。

③刺突状カキヤブリ

接合に関する痕跡の中で線状カキヤブリや粘土継ぎ足しはほぼ全てのものに確認されたので, 刺突状カキヤブリの有無やその種類に注目する。なお, この痕跡が不明瞭なため刺突痕の有無や形態の判別が困難なものも少なくない。

ヘラ状 : 先が尖ったヘラ状の工具によって刺突されている。工具の大きさがやや大きいと思われるものもある。

棒状 : 先端が円錐形の棒状の工具で刺突されたもの。名前としては不適格かもしれないが, 仮に「棒状」と呼んでおく。

④色調

色調は大まかに, 褐色・灰色と褐色の部分があるもの・暗褐色・暗灰色・灰色の5種類に分類する。第3表では文様分類ごとに各色調の百分率を示している。

3-3 文様と製作技法の対応関係

ここで文様の分類と製作技法による分類を対応させてみる(第3表)。横軸の紋様分類A~Cは蓮弁グループに, ①~⑭は前述の仮分類に当たる。

また, 製作技法による分類は, 刺突状カキヤブリ, 瓦当側面の状態, 瓦当裏面の状態に当たる。判別が不可能だったものがあるため, それぞれの項目の合計数は出土点数には満たない。なお, 色調については⑫・⑭は緑釉瓦を除いて算出している。なぜならば緑釉が施されたものの色調は必ず

第 3 表

文様分類		A					B						C		
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
数量 (個)		20	25	71	18	34	20	68	8	9	86	39	14	17	40
刺 カ キ ヤ ブ リ	無	10		1	2	2	2				1				
	ヘラ状	2	10	35	9	11	6	23	7	5	55	6	7	7	18
	棒状						3	7			4	9	3	2	5
側 面	ヘラケズリ	10	5	5	7	3	7	29	1	3	62	25	7	9	21
	横ナデ		9	22	2	13	6	10	3				1	2	3
	回転ナデ		3	15	4	1									
	見られず				2			1		2			1	1	
裏 面	粗い	12	1	2											
	多方向ナデ		9	16	2	10	4	4				2	1		3
	渦巻状		7	17	6	4	2								
	見られず	2	4	8	8	6	7	23	7	4	41	4	8	12	20
	ケズリ	2	1	3				2			4	25		1	1
	縁ヘラケズリ							11			25	5	3		8
色 調 %	褐色	55	20	38	44	32	20	17	25	33	15	44	8	29	26
	褐灰色	15	24	7	44	12	5	9	25	11	16	3	38	6	5
	暗褐色	10	4	4	6	3				11	20	21	8		18
	暗灰色	5	20	20		18	25	12	38		30	15	31	47	32
	灰色	15	32	31	6	35	50	62	12	45	19	18	15	18	19

褐色であるため、数値に影響を与えると判断したからである。

この表から分かることは、まず①のみ刺突状カキヤブリ「無」が大半を占めているということである。刺突状カキヤブリの有無やその種類の観察は丸瓦部の剥がれ具合によって難しい場合が多く、②以降においても或いはもっと多数刺突状カキヤブリ「無」があるかもしれないが、①の場合は明らかに刺突状カキヤブリが確認できないものが多かった点が他の分類と異なった。さらに、刺突状カキヤブリのうち棒状のものは①～⑤においては全く確認されなかった。なお、⑥以降では刺突状カキヤブリがないと思われるものがほとんど見られないので、刺突状カキヤブリがこの段階にはほ

ば完全に定着していたと思われる。工具の種類に関しても太さなどによってはさらに様々な種類に分けることができるかもしれない。

側面の状態に関しては一貫してヘラケズリのものが見られるが、②以降からは横ナデのものも見られるようになる。一方で回転ナデのものは②～⑤に一定数見られる以外は全く見られない。これらの製作技法の差が何を示すかは定かではないが、それが工人差にしろ時期差にしろ、②～⑤はある程度近い時期に作られたと考えてもよいだろう。

裏面の状態では、「粗い」ものは主に①に見られ、④以降では全く見られなくなる。渦巻状のナデは主に②～⑥にかけて見られ、この特徴を持つ瓦当の側面は殆どが回転ナデでもあり、また前述のようにこれらに用いた工具が同じものであることが想定されるため、これらは相関性が強いことが分かる。また、瓦当裏面の縁をヘラケズりする技法は⑦以降に見られるようになる。この特徴を持つ瓦当の側面は全てヘラケズリのものでありナデを施したものは確認されなかった。

色調については①と④においては褐色の割合が非常に多く、中でも特に高句麗の瓦にもよく見られるようなオレンジ色に近い明るい褐色のものが目立った。②③⑤では徐々に灰色のものが増えて褐色の割合を追い越し、⑥～⑧では圧倒的に灰色が多くなる。(⑧はやや傾向が異なるが、出土数が少ないため詳しいことは言えない。)⑪のみ前後の分類の傾向とはやや異なった割合を見せるが、この⑪は製作技法についても一種独特な特徴を見せている。現段階ではそれが何を意味するのかわからないがやや注意が必要である。また、この⑪で大きな割合を占める褐色のものには明るいオレンジ色のものも多く含まれる一方で、⑪を除く⑩～⑭においては、暗灰色や暗褐色等、色調が暗いものが目立つという特徴がある。

以上のことから、まず、蓮弁文様のAグループとBグループを境として製作技法においても変化が見られるということである。即ち、棒状の刺突状カキヤブリが見られるようになることや、側面の回転ナデと裏面の渦巻状ナデが衰退する点である。そして、色調に関しても、この段階から灰色が圧倒的に多くなる。

3-4 編年

筆者は田村氏が2001年に示した編年のうち前半段階の、珠文が円環の内側にあるものが古く外に出たものの方が新しいということに関しては同意するが、後半段階の、珠文のないものが最も年代が下るとする分類に関してやや同意できない点があった。そこで新たに独自の型式学的な分類を試み、上記の①～⑭の分類を提示した。ここでは、その製作技法と対応させた上で10型式に整理していく。

まず、①と②は殆ど同じ文様構成を持つが、①には刺突状カキヤブリを有するものが殆どないなど製作技法の面でかなりの違いが見られる。しかしこの①と②の違いは、実際に実物を手にとって見ないと判断が難しく、写真や図面上でしか判断できない資料に関しては判断材料とはできない。

さらに、①の中にも若干ではあるが②と共通する製作技法上の特徴を持つものもあるため、これらをまとめてAグループ1式（以下A1）とする。中でも①は、刺突状カキヤブリ「無」が多く、他の製作技法も単一的であり、また型式学的にもっとも整った具象的な文様を持つことなどを総合すると、田村氏も述べているように、これが上京龍泉府址最初期の瓦と見てもよいのではないだろうか。また、①は色調において高句麗の瓦に似た明るいオレンジ色のものを多く含む点や離れ砂の使用が多い点から、高句麗と共通する要素を多く含む在来の技法で渤海上京龍泉府址の瓦が作られ始めたと考えられる。そして②の段階に高句麗では一般的ではなかった刺突状カキヤブリや回転ナデなどの要素が加わってくると思われる。この回転ナデという技法は前述のように統一新羅の瓦当に多く見られる。しかし今回は唐など他地域の瓦当について調べることができなかつたため、この技法がどこから渤海に伝わったかについては今後の課題としたい。

次に③であるが、A1と似た文様構成をしているが珠文の数が9個になり、蓮弁の肉部が大きく突き出てくるなど変化が生じている。製作技法は②と同じように多岐にわたっており、複数の工人集団が出てきた可能性もあるといえよう。また、色調も灰色系のものが徐々に増えてきており変化が見られる。よって③をA2とし、A1と並行する時期がありながらも若干下るものとする。

さらに、④と⑤については文様構成や製作技法に大差が見られないためまとめてA3とするが、④には①と近い特徴を持つものが多いため、時期としては①にあまり遅れをとらずに作り始められたものと考えられる。

⑥は蓮弁の特徴がAとは異なり、製作技法にも変化が生じはじめる。⑥の中でも珠文の数等文様構成に違いが見られるが、この⑥をB1とし、時期はAに続くものとする。

⑦と⑧は基本的な文様構成が同じであり、また⑧の出土数が少ないこともあって、これらをまとめてB2とする。文様においては珠文が円環外に移るという変化が見られ、蓮弁の肉部のふくらみ方も安定し、製作技法にも新たに瓦当裏に縁ヘラケズリが見られるようになることを考えると、B1よりも時期が下るものと思われる。色調はB1に比較的近い割合を示している。

⑨と⑩はやや蓮弁の特徴を異にするが、⑨の出土数が非常に少ないため⑩とまとめB3とする。⑩は最も出土数が多く、この時期に新たに多くの建物が建設されたり改築されたりしたことがうかがえる。渤海が最も栄えた大仁秀の頃のものだろうか。弁間飾りに変化が生じ紡錘形から十字形に変化するため、B2よりも後のものとする。

ところで、⑪は他とやや異なる蓮弁の特徴を持ち、弁間飾りも他には見られない植物形である。さらに、色調も明るい褐色のものがやや目立つなど位置付けが難しいが、製作技法の特徴は特に特異なものはない。この⑪をB4とする。この特徴をもつ瓦当は中朝合同調査時には出土していないことから上京龍泉府址の中でも用いられた場所が限定されているようである。作られた時期の明言はできないが、おそらくB2やB3に近いと思われる。

⑫は蓮弁がBグループで珠文がないものだが、大型に比べて中・小型のものが目立つ。これをB5とするが、その作られた時期はやや長い可能性がある。中・小型のもので文様を省略するために

珠文がなくなり、その特徴が大型の文様構成として定着していったと思われるからである。蓮弁の肉部がCグループの様に細い線状となっていることから、時期的にはこれらがBグループの最後に位置していたと思われる。

⑬になると文様構成はB3と同じだが蓮弁が著しく細長くなる。これをC1とする。C1はB3

第4表

中村分類		田村氏 2005 年分類
A (第Ⅰ期)	1式	1 a 式
	2式	1 b 式
	3式	2 a 式
B (第Ⅱ期)	1式	2 b 式・2 c 式
	2式	3 a 式・3 b 式
	3式	4 a 式・4 b 式・4 c 式
	4式	5 式
	5式	6 a 式
C (第Ⅲ期)	1式	4 d 式
	2式	6 b 式・6 c 式・6 d 式

に次いで作られたものと考えられ、上記のB5ともある程度時期が重なっていたのではないと思われるが、BグループとCグループの間に製作技法上の顕著な違いは認められない。ただし、Cグループのものは胎土の含有砂粒が多い傾向にあり、瓦の胎土に混和する砂の量が増えたのだろうか。

⑭は殆どが大型であり、これをC2とする。この段階に珠文がないという特徴が大型の瓦当に定着するのだろう。C1と同じく胎土が砂質のものが多く、色調は暗褐色や暗灰色といった暗い色調のものがやや目立つ。上京龍泉府址では最も新しい型式であり、渤海が滅亡する頃まで作られていたものと思われる。

4 まとめと展望

筆者は上京龍泉府址出土軒丸瓦の蓮弁の形態を重視した文様の型式学的な編年を試み、それらの製作技法に注目して編年の裏づけを行った。

まず主に蓮弁の形態からA・B・Cの3グループに大別し、さらに細分して14型式に分類した。そして、製作技法との対応関係を整理し編年の裏づけを行った。簡潔にまとめると以下のようになる。

Aグループ1式：7弁で弁間飾りは紡錘形。珠文が円環内に7個。(仮①・②)

2式：7弁で弁間飾りは紡錘形。珠文が円環内に9個。(仮③)

3式：6弁で弁間飾りは紡錘形。珠文が円環内に10個。(仮④・⑤)

Bグループ1式：6弁で弁間飾りが紡錘形。珠文が円環内に6～8個。(仮⑥)

2式：6弁で弁間飾りが紡錘形。珠文が円環外に6個。(仮⑦・⑧)

3式：6弁で弁間飾りが十字形。珠文が円環外に6個。(仮⑨・⑩)

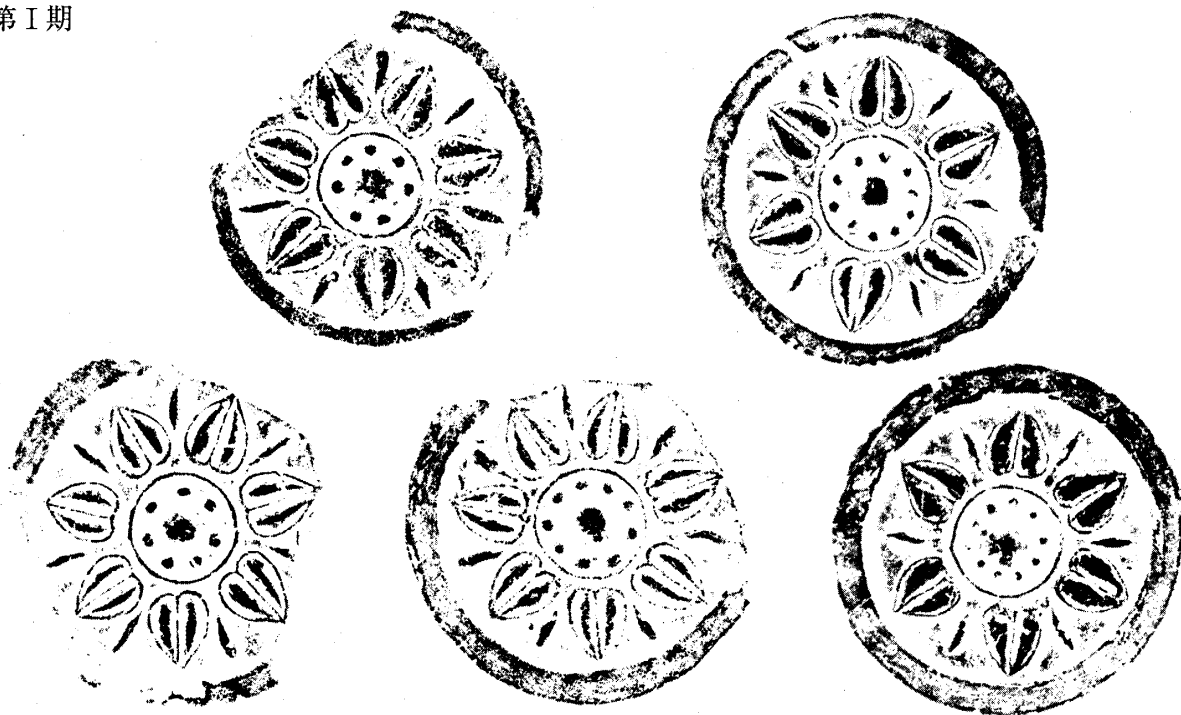
4式：6弁で弁間飾りが植物形。珠文が円環外に6個。(仮⑪)

5式：6弁で弁間飾りが十字形。珠文は存在せず、中型が多い。(仮⑫)

Cグループ1式：6弁で弁間飾りが十字形。珠文は円環外に6個。(仮⑬)

2式：6弁で弁間飾りが十字形。珠文は存在しない。(仮⑭)

第Ⅰ期



第Ⅱ期

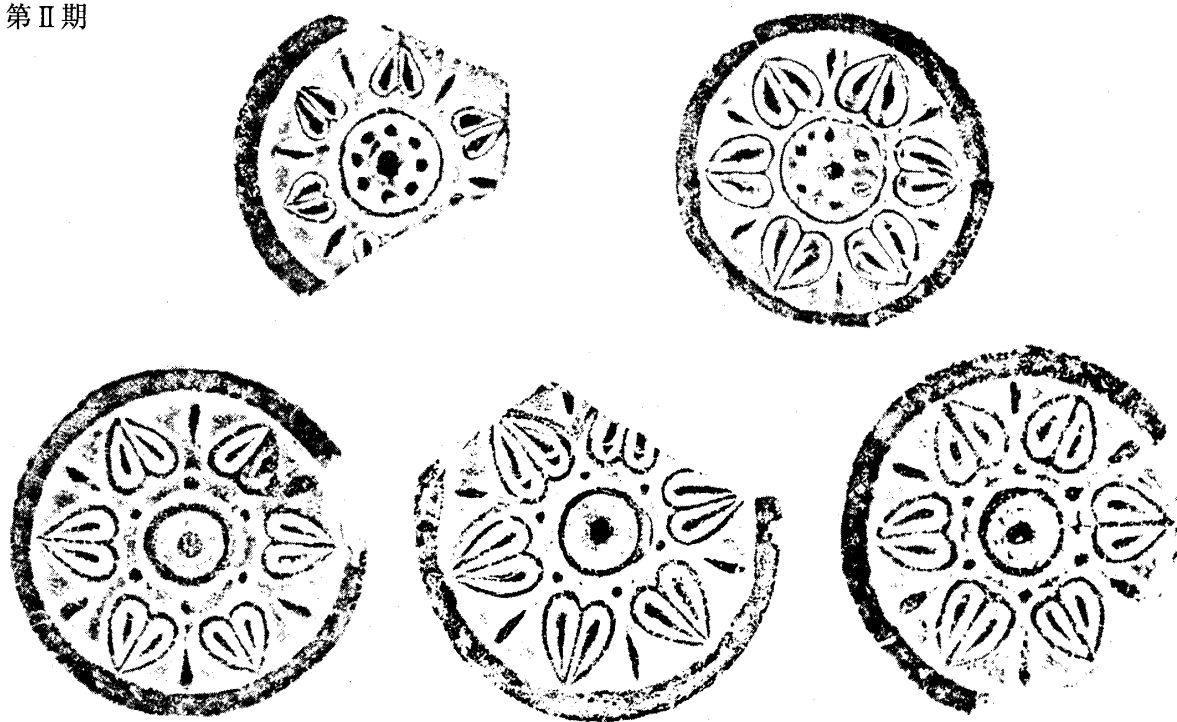
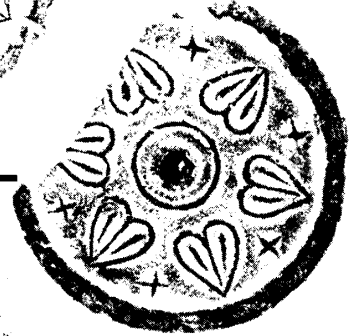
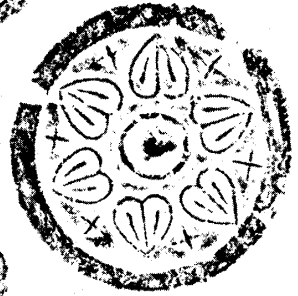
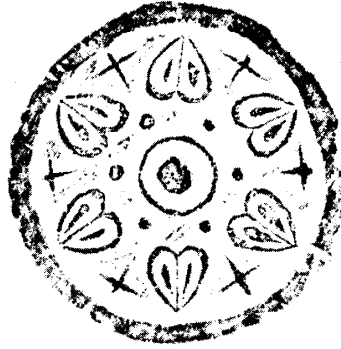
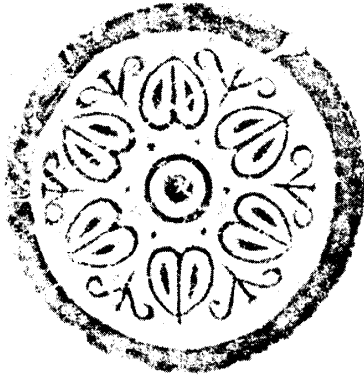
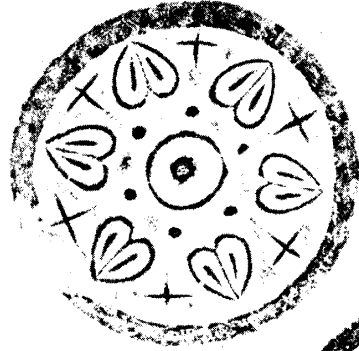
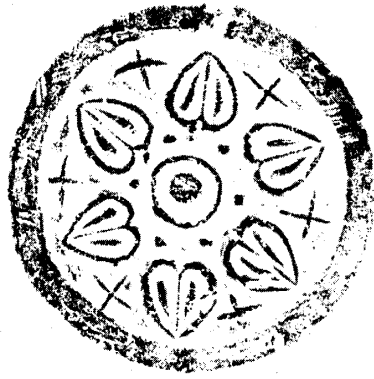
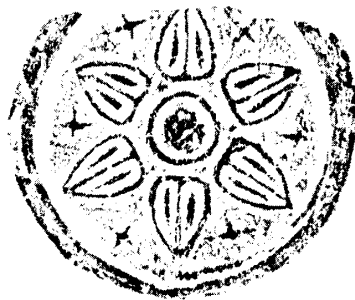
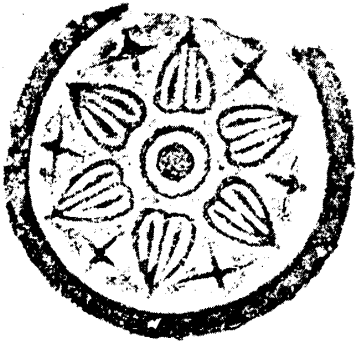
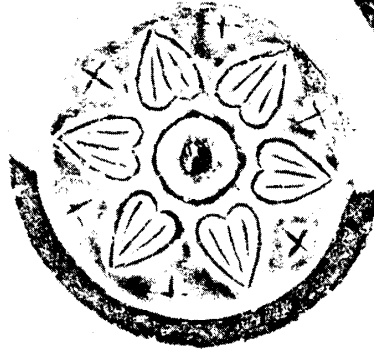
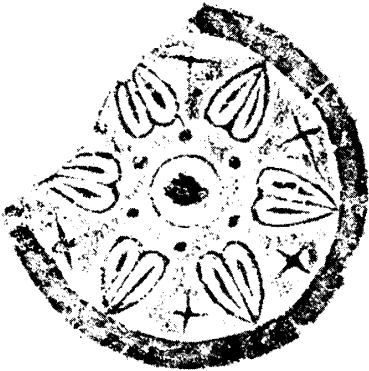


图20 上京龍泉府出土軒丸瓦編年表

第Ⅱ期
(つづき)



第Ⅲ期



ここで、Aグループの1式と3式が同じ形態の蓮弁（A-I）を有するほぼ同時（3式の方がやや遅れる可能性がある）に存在した最古式の瓦当であって、やや遅れて2式が登場するものと考えられる。最も具象的な蓮弁を持つことと製作技法上に見られる高句麗瓦当との類似点を総合して考え、これらが製造使用された時期を上京龍泉府址が建都された時期、第I期とする。また、これらは宮殿区での出土が顕著であった。

続くBグループでは蓮弁の特徴が大きく変化し、輪郭により丸みをもち、肉部が輪郭線から離れて盛り上がるといった特徴の蓮弁になる。この時期の瓦の出土点数が最も多く、弁間飾りも十字形が主流となっていく、植物形などの特殊なものも現れてくる。順番はほぼ数字の順番に沿っていると思うが、5式の珠文を持たないという特徴はもともと小型品の図案における簡略化から始まったものであり、大型品の成立はBグループの最終段階であって、肉部が線状の細いものになっている。Bグループ全体として渤海の繁栄期（第II期）のものと考え、宮殿の屋根の補修や増築の他にも、周辺に宮殿以外のたくさんの建物が建てられた時期と考えられる。

Cグループは蓮弁のハート型が非常に細長くなり、上の窪みがなくなってもはやハート型と呼べないものも出てくる。文様の抽象化が最も進んでいる。CグループのうちB3式と同じ文様構成のものはCグループの中では比較的古いものであり、珠文がないという特徴が大型の瓦当に定着する段階のC2式が最も新しい型式と考える。胎土が砂質になり、色調も暗褐色や暗灰色といった黒っぽいものが多くなる。この時期を渤海滅亡間近の衰退期である第III期に比定する。寺址や門址からの出土が非常に多いことが特徴である。

さて、渤海の歴史を考えるためには勿論、上京龍泉府址に都が置かれていた以前のこと、つまり旧国や顯州のこと、そして東京に短期間都が置かれていたことなどについても考えなくてはならない。上京龍泉府址以外の都やその他の遺跡から出土した遺物をも含めた上で上京龍泉府址出土の遺物と比較し、その建国から滅亡に至るまでの変遷等を明らかにしていくためにはまず、今のところ最も多くの遺物が出土している上京龍泉府址の軒丸瓦及び平瓦や丸瓦等の研究を重ね、押印瓦など特殊なものを通じてそのセット関係を明らかにすることや、さらに、今回は論じることができなかったが、それらの出土の傾向によって上京龍泉府址内での建物の存続期間等について考えることが今後の課題である。

謝辞

この論文を執筆するにあたって、渤海の瓦についていくつもの論文を出されている田村晃一先生には、同じ部屋で作業を行っている際など、瓦のことのみならず渤海全般について本当にたくさんのお話を教えていただきました。また、他の多くの方々にも様々な面において大変お世話になりました。

最後に、遺物の扱いに慣れていない私にたくさんの貴重な資料に触れることを許してくださった東京大学考古学研究室の先生方に感謝の意を表して本稿を閉じさせていただきます。

註

- 1) 本論文は筆者の2004年度卒業論文の一部を、2005年に出版された田村晃一氏編の『東アジアの都城と渤海』における田村晃一氏や清水信行氏らの諸論文を検討した上で若干の修正を加えたものである。
- 2) 田村氏2005の図版11-3は6 a式と説明がされているが、写真を見る限り他2点とは異なり、同ページ記載の6 b式のものと同じである。氏に確認したところ図版作成上のミスとのこと。
- 3) これらは破片も含め全て1点としてカウントしており、注記後接合したものについては合わせて1点としている。なお、ここでは2005年の田村氏の論文で紹介されている資料数と大幅に違いが出てきているが、これは氏が地下倉庫以外の場所に収蔵されているものについても扱ったこと、型式の判別できる資料しかカウントされなかったこと等によって生じた差異である。もちろん、地下倉庫に収蔵されているもののみによって出土遺物全ての特徴を網羅できるわけではないため、他の資料も検討する必要があるが、これは今後の課題とする。
- 4) 図14の下に図6～14についての詳細を記した付表あり。
- 5) 瓦の部分名称についても大脇氏の呼称に従う。
- 6) 玉縁部に移る区切れの箇所では布目の痕跡も薄くぼやけている。
- 7) 清水氏の論文においては平行線を刻んだ叩き板で叩いたものがあるとされているが、氏の観察表に平行叩き目文を施したとされている BT 123-1 は、筆者の観察によれば縄目であった。
- 8) 清水氏も先の論文で瓦刀痕（分割截線）には、丸瓦部から玉縁部にかけて一気に引くものと、丸瓦の凹面側から玉縁部の凸面に向かって瓦刀を突き刺すように貫通させそのまま戻して丸瓦部の凹面に刻み目を入れるものの二種類があると述べている。しかし、氏の観察表を見ると、刻み目を入れた方向にはいろいろなものがあるということが伺われる。今回は筆者の観察眼が甘かったのか、前述のものしか確認できなかったが、氏の観察するようにいろいろなものがあるのかもしれない。
- 9) 実際、周縁部のみが部分的に瓦当表面から剥がれ落ちているものが多い。

<引用・参考文献>

- 秋山進午 1986「渤海“塔基”壁画墓の発見と研究」『大鏡』第10号：151-168
王承礼・曹正榕 1961「吉林敦化六頂山渤海古墓」『考古』1961-6期：298-301
王承礼 1979「敦化六頂山渤海古墓清理発掘記」『社会科学戦線』1979-3期：200-210
大脇潔 1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第49冊：1-56
国立慶州博物館 2000『新羅瓦埴』
黒龍江省文物考古研究所 1986「渤海磚瓦窯址発掘報告」『北方文物』1986-2期：33-38
黒龍江省文物考古研究所ほか 1999「渤海上京龍泉府龍泉府遺址1997年考古発掘収獲」『北方文物』1999-4期：42-49
2000「渤海上京龍泉府址龍泉府正北門址発掘簡報」『文物』2000-11期：4-22
2000「渤海上京龍泉府址龍泉府宮城第二宮殿址発掘簡報」『文物』2000-11期：13-22
2003「黒龍江寧安市渤海上京龍泉府址龍泉府宮城第三宮殿址的発掘」『考古』2003-2期：34-41
黒龍江省文物考古工作隊 1985「渤海上京龍泉府址宮城第2, 3, 4号門址発掘簡報」『文物』1985-11期：52-61
1985「渤海上京龍泉府址宮城第一宮殿東, 西廊廡遺址発掘清理簡報」『文物』

中 村 亜希子

1985-11期：48-51

- 近藤喬一 1982「瓦の範と瓦当」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会, 615-642
斎木勝 1987「瓦当範一例」『考古学雑誌』第73巻第2号：105-113
斎藤優（甚兵衛） 1943『半拉城』琿春県刊
佐原眞 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号：30-64
清水信行 2005「渤海上京龍泉府址出土の平瓦・丸瓦」『東アジアの都城と渤海』財団法人東洋文庫, 191-240
朱栄憲 1971『渤海文化』社会科学院出版社
朱国忱・金太順・李硯鉄 1996『渤海故都』黒龍江人民出版社
谷豊信 1989「四、五世紀の高句麗瓦に関する若干の考察—墳墓出土瓦を中心として—」『東洋文化研究所紀要』第百八冊：225-307
田村晃一 1995「東北アジア考古学における渤海の位置づけ」『環日本海論叢第8号渤海と環日本海交流』：1-18, 新潟大学環日本海研究会
2001「渤海の瓦当文様に関する若干の考察」『青山史学』第19号：1-15
2002「渤海瓦当論再考」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四七輯・第四分冊：159-174
2004『渤海都城の考古学的研究』平成14・15年度科学研究費補助金研究成果報告書
2005 a 「上京龍泉府址出土瓦当の蓮花文に関する考察」『東アジアの都城と渤海』財団法人東洋文庫, 241-299
2005 b 「上京龍泉府址出土の押印瓦に関する若干の考察」『東アジアの都城と渤海』財団法人東洋文庫, 301-333
中国社会科学院考古研究所 1997『六頂山与渤海鎮』中国田野考古報告集考古学専刊丁種第56号中国大百科全書出版社
中朝合同考古学発掘隊 1966『中国東北地方の遺跡発掘報告1963-1965』社会科学院出版社
寧安県文物管理所ほか 1878「黒龍江省寧安県出土的舍利函」『文物資料叢刊』2号：196-201
濱田耕作 1934『新羅古瓦の研究』
原田淑人・駒井和愛 1939『東京城』東方考古学叢刊甲種第五冊
三上次男 1947「渤海の瓦」『座右宝』10・11号, 12号：40-48, 座右宝刊行会
森郁夫 1983『瓦と古代寺院』六興出版
李殿福（西川宏訳） 1991『高句麗・渤海の考古と歴史』学生社
劉濱祥・郭仁 1995「渤海瓦当の分類与分期研究」『北方文物』1995-3期：80-86
リュ・ビョンフン 1992「渤海瓦当文様について」『朝鮮考古研究』1992-4期：24-28

<図版出典>

図15・図17：大脇 1991（再トレース・一部改変）
その他はすべて筆者作成